

京都府埋蔵文化財情報

第 13 号

篠尾太田地遺跡	大槻 眞純	1
経塚出土の押出仏	難波田 徹	6
—昭和59年度発掘調査略報—		11
1. 上 中 遺 跡	4. 篠・西長尾A地区作業場跡	
2. 千代川遺跡第7次	5. 長岡京跡右京第165次	
3. 千代川遺跡第8次	6. 平安京跡右京一条三坊九町	
資料紹介 亀岡市与野廃寺採取の古瓦		23
府下遺跡紹介 22. 田野城跡	23. 亀岡市大堰川西岸の中世城跡	26
長岡京跡調査だより		33
センターの動向		37
受贈図書一覧		38

1984年9月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

篠 尾 太 田 地 遺 跡

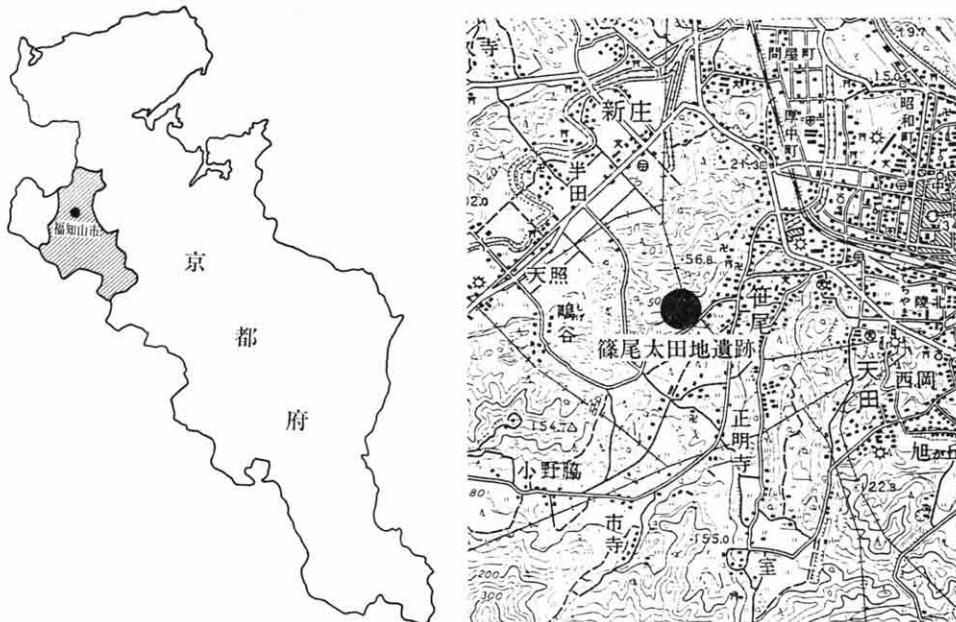
大 槻 眞 純

1. はじめに

ここに紹介する遺跡は、京都府福知山市大字篠尾小字太田地に所在する篠尾太田地遺跡である。この遺跡は、昭和58年11月に重機によって削られた丘陵の崖面において多数の土器片が発見されたことから、遺跡として位置づけられたものであるが、付近一帯はすでにほ場整備事業が完了しており、遺跡のほとんどが水田下に埋没している状況であった。この遺跡での採集遺物は多種にわたり、遺存の度合もかなり良好なものであった。これらの遺物については、すでに一部分を紹介したところではあるが、ここでは新たな事実をも含めて改めて報告することにした。

なお、掲載した資料は地元有志の採集品も含んでおり、氏の御好意により借用し活用させて頂いた。さらに、小稿を作成するにあたっては福知山市教育委員会の崎山正人氏に負うところが多く、また挿図に関しては福知山市内在住の中井美好・田淵末浩氏の手をわずらわせた。ここに明記して衷心より謝意を表わすしだいである。

2. 遺跡の位置



第1図 遺 跡 の 位 置

篠尾太田地遺跡は、福知山市街地の南西に位置し、国鉄山陰線福知山駅より西南西方向に約 1.5 km の地点にある。この地域は古期洪積層より成り、舞鶴湾に注ぐ由良川の一支流である弘法川によって形成された扇状地にあたる。この弘法川は現在こそ幅数mの小河川であり、水もさほど流れてはいないが、もともとは石をも運ぶ流れの急な川で、その川底深くには遺物の包含層や焼土層も確認されている。弘法川の由来については、弘法大師が諸国を巡錫中にこの場に立ち寄ったことからこの名称が付けられたとの言い伝えが残っている。また遺跡の名称である「篠尾」は、笹の生えた丘陵の端を意味している。

この遺跡の周辺には小高い丘陵が連なっており、その丘陵上には数多くの遺跡が分布している。たとえば、向野・向野西・正明寺の各古墳群^(注2)や豊富谷丘陵の遺跡群^(注3)などは発掘調査が実施されており、古代における埋葬形態が明らかにされたばかりでなく、墓制の在り方について多くの問題を提起している。さらに半田遺跡^(注4)では、縄文時代から弥生時代にかけての遺物が多数発見され、当時の人々の生活様式が明らかにされている。

このように、篠尾太田地遺跡周辺には多くの遺跡が広く分布しており、中央丹波地域における古代を伺い知ることのできる地域として注目されている。

3. 出土遺物(第2図)

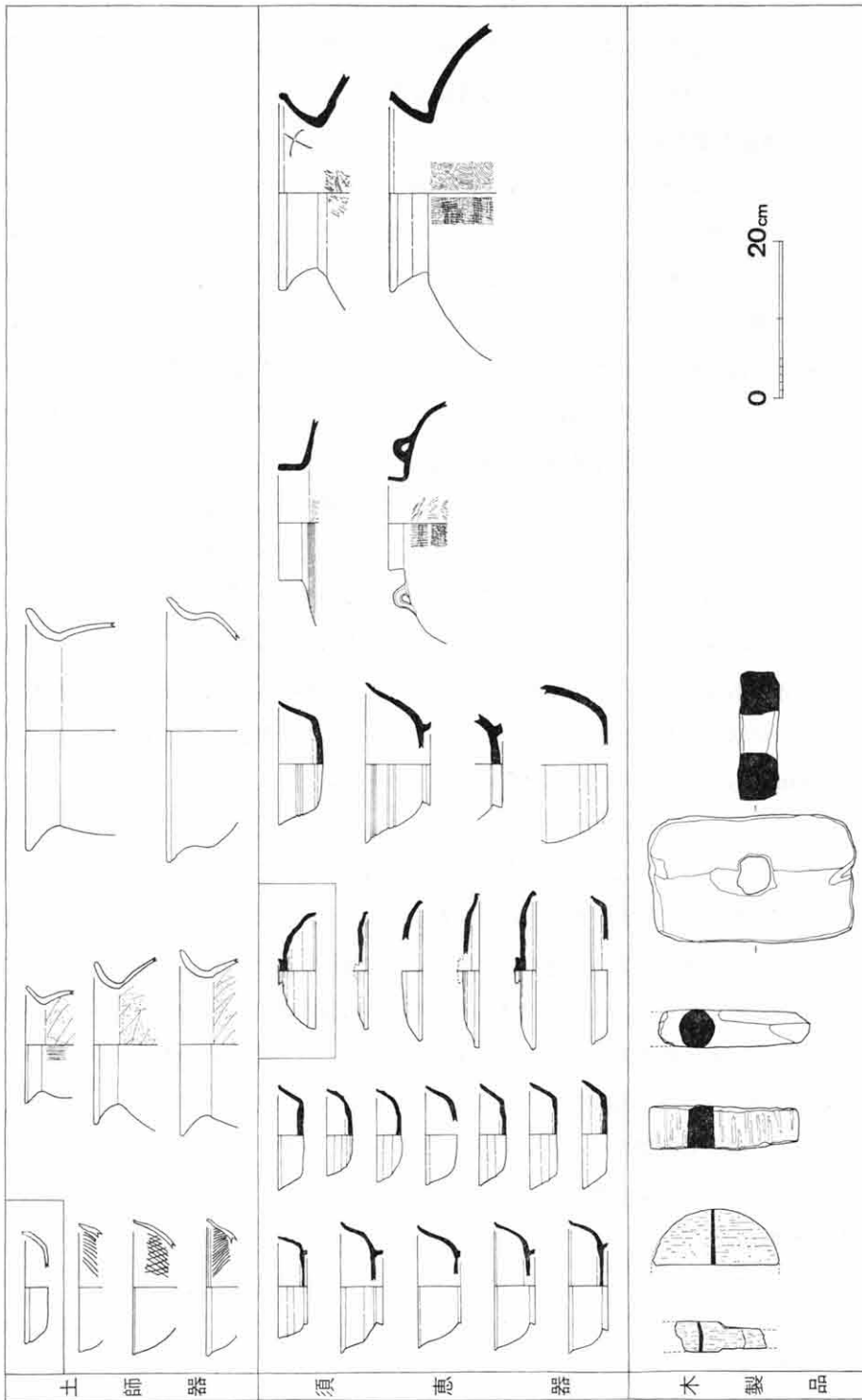
当遺跡から出土した遺物は表面採集によるものが主であるが、木製品については丘陵崖面からの採集である。この崖面には青灰色の粘土層がU字状に堆積しており、あたかも溝跡を想起させるような状況であった。採集遺物は第2図に掲げたとおり多種におよぶが、ここでは種類ごとにとりあげて、それぞれについて説明を加えていきたい。

(1) 石 鏃

出土した石器のうち、まとまった数で出土しているのは石鏃だけである。石鏃は基部の挟り込みの形状から2タイプに分類できる。Ⅰタイプは凹基無茎式のもの、Ⅱタイプは平基無茎式のものであるが、わずかながら凸基無茎式に近いものも含まれている。全長は1.5 cm 程度のものから 3.5 cm ほどのものまであり、また基部長が全長を上まわるものもある。石材はチャート製が大半であるがサヌカイト製も含まれている。これらの時期については、土器等が1点も出土していないことから明確にすることはできないが、他の遺跡から比較して縄文時代中期頃に位置づけられるものと考えられる。

(2) 弥生式土器と土鍾

弥生式土器は地元有志の採集品ばかりであり、出土地点も明確ではないが、当該遺跡地内での採集であることは明らかである。いずれも細片であるため図化できるものは1点もないが、甕あるいは壺の一部分であると考えられる。土鍾は合計5点出土している。いず



第2図 土器・木製品実測図

れも製作途中で中央部を指で押えているため、外方にやや張り出した形状を呈している。使用時期については定かではないが、この土鍾とともに前記の弥生式土器が同時に採集されているため、この時期に比定することも可能であろう。

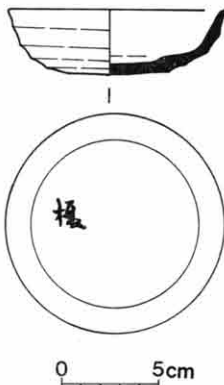
(3) 土師器と須恵器

土師器は出土土器の3割を占め、器形は坏・埴・甕・鉢に分類できる。坏は1点だけであるが古墳時代後期の所産と考えられるものが含まれている。埴はすべて内面に暗文が施されているが、それぞれの暗文手法が右上・左上・格子状と異なっている点は注目すべきことである。甕は口径12cm程度のものから25cmほどのものまで数種類出土している。いずれも体部外面にハケ調整が施されているが、内面はヘラケズリするものとナデによる調整がされているものがある。鉢は口径27cmで、大きく外反する口縁部を有し、体部は頸部から少し張り出した後に急角度で底部に向う器形を有している。

須恵器は出土土器の7割を占め、器形は坏・蓋・皿・甕・壺に分類することができる。坏は高台付きのものと高台なしのものに分けることができる。高台付きのものは口径13.2cmのものから17cmのものまで出土している。高台はいずれも「八」の字形に貼り付けられており、口縁端部は上外方に屈曲して伸びる。体部はナデ調整によるものとヘラ調整によるものがある。そのうち口径13cm前後のものは規格等が一定であり、生産段階における一種の規格性があったものと思われる。高台を有しない坏は、口径11.3cmのものから13.2cmのものまでである。底部は丸く作るものと平坦に作るものとに分けることができ、体部の調整もナデによるものとヘラによるものに分類できる。蓋は端部を丸く仕上げるものと細く仕上げるもの、さらに大きさによっても分けることができる。調整はすべてヘラによるが、端部だけはナデが施されている。皿は高台付きのものと高台を有しないものとに分けることができる。高台付きのものは、坏と同様に「八」の字形に貼り付けられており、体部の調整もヘラによる。高台なしのものは、口縁端部の内側に凹線を施すものが多い。甕はいずれも体部内面にタタキが施されているが、外面はタタキをナデ消しているものがある。焼成は極めて堅緻である。口縁部は直線的に上方へ伸びるものや、やや外反しながら上方へ向うものがある。壺は長頸壺と肩部に把手を有するものが出土している。いずれも焼成良好で極めて堅緻である。

(4) 木製品

以上の遺物の他に木製品も多数出土している。たとえば板材を細長く、薄く、また一部に切り込みを入れて斉串として利用したもの、曲物の底板として利用したもの、自然木の先端を尖らせて杭として利用したものなどの他、木材を長方形に加工し、所々に縄をくくりつけた痕跡が残っているもの、長方形の木材の中央部に円形の穴を穿ったものなどが出



第3図 墨書土器

土しているのではあるが、その用途については明確ではない。以上の他に多数の木製品があるが、その形態および性格については、ほとんどのものが不明である。

4. おわりに

以上に略述してきたとおり、この篠尾太田地遺跡では多種にわたるかなり良好な資料が出土している。このことは、遺跡の性格を決定づけるうえで非常に大きな意味を持っていると言えよう。

第1に縄文時代から平安時代までの各時期の遺物が出土していることは、かなり長期間にわたって人々が生活を営んでいた場所であることがわかる。

第2に齊串や第3図に示した墨書土器『榎』等の出土は、この地域が特異な場所であったことを示唆している。

第3に中央丹波地域では数少ない奈良時代の良好な遺物が出土したことは、当時の急転する社会情勢の中ではっきりとした位置づけの下に、集落が形成されていたことを裏付けている。

このように出土遺物の一部を考えただけでも多くの問題を提起しており、今後、他地域との比較検討や在地における在り方等、様々な要素を持って課題に取り組んでいかなければならない。いずれにしても狭長な丘陵裾において遺跡を確認できたことは、見落としがちな遺跡の分布状況に一種の指針を与えてくれたことになり、今後の遺跡確認や分布調査については綿密な調査を実施する必要がある。

(大槻眞純＝福知山市教育委員会社会教育課主事)

- 注1 大槻眞純「福知山市篠尾採集の遺物1・2」(『太邇波考古』第4号 岡丹技師の会) 1984.2
 注2 「正明寺向野古墳発掘調査概要」(『福知山市文化財保護委員会報告書』福知山市教育委員会) 1962
 近藤義行ほか『向野西古墳群発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会 1974
 小泉信吾ほか『向野西古墳群発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会 1981
 注3 松井忠春ほか「豊富谷丘陵遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982
 注4 平良泰久ほか『半田遺跡発掘調査概要報告書』福知山市教育委員会 1975

経塚出土の押出仏

難波田 徹

はじめに

今から半世紀前の昭和6年、一個の、それも像容の上半身しか残っていない断片の「金銅板押出菩薩像(押出仏)」が、珍しい数の遺物と共に京都市左京区の鞍馬寺の経塚から発見された。この鞍馬寺は、通説によれば、延暦15(796)年に造東寺長官の藤原伊勢人によって創建されたと言われており、その経塚は紀年銘遺物の検討などから、平安時代後期、12世紀の前半期に築かれたとみてまちがいないとされている。昭和6年のは偶然の機会の発見とはいえ、過去(明治11年・大正12年)にもこうした経験もあったので、遺物は散佚することなく今日に至っている。その時、この押出仏はどのような評価をうけたのであろうか。こうした発見例を踏まえて、昭和8年には田沢金吾氏の『鞍馬寺経塚遺宝』が刊行されているが、結論的に言えば、田沢氏の指摘にもあるように、菩薩像を型どった押出仏の技法から、その制作は奈良時代であり、経塚が築かれた時代とは時期がかなり隔っているということになる。

経塚への埋納品ということから言えばこれ以上の結論はでないわけであるが、ここでは押出仏の制作された時代のことを考えたいのである。このことは結果的には一寺院の草創にかかわることにもなるので軽々に論ずることはできないが、多くの寺院がそうであるよ

うに鞍馬寺もその草創に関しては宗教的な神秘のベールにつつまれているとも言える。

『鞍馬蓋寺縁起』には、鑑禎^{がんでい}が宝亀元(770)年に開いたと伝えているからである。こうした資料が少なく証明することがかなり困難な草創について、ここで取り上げる一個の素材、しかも断片の資料がどのような推論を導いてくれるのであろうか。日頃、調査をしていて思いつくままにまとめた一つの試論であり、大方の御叱正を仰ぎたい。



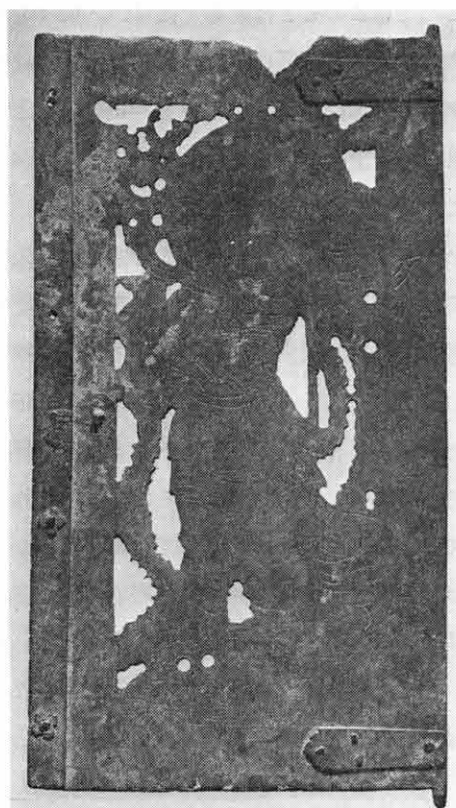
第1図 金銅板押出菩薩像

1.

押出仏の制作年代がはっきりしているとは

いえ、まず手順としては、なぜ時代の異なった遺物が経塚に埋納されたのかと言うことを明らかにしなければならない。これに関連する史料でもあればいいのだが、それを証明する手段は全くない。これまでに他の経塚から時代の異なった奈良時代の遺物—その多くは仏像類であるが—の出土例があることなどから、永らく伝世していた仏像を経塚が築かれる時に何らかの事情で埋納したのではないかと解かれてきている。鞍馬寺の場合もこの域を出ない。このように考えてくると、平安時代後期の経塚から奈良時代の押出仏が昭和6年に発見されたという事実関係しか残らないことになる。これでは問題の解決にはならない。

ここで話を一歩進めるために、同じ昭和6年に発見された「銅板毘沙門天像扉(銅板扉)」を類例として提出し、これから証明する補助



第2図 銅板毘沙門天像扉

資料としたい。経塚が築かれたのは12世紀前半期といったが、この銅板扉には「文応元年七月八日」の銘が刻まれている。文応元年は西暦で1260年であり、このことは経塚の築造時よりおよそ150年ほど時代が降る年号であり、さきの押出仏とは逆の証明をしなければならない。逆とは、なぜ平安時代後期の経塚に鎌倉時代の銅板扉が埋納されたのかということである。これまでに経塚として確認されているものの多くは単一経塚、すなわち一時期に限定されて築かれたものが圧倒的であるが、なかには複合経塚というものもある。何回かの追納が行われた経塚をこのように呼んでいる。この単一、複合という意味から言えば、時代の降る遺物の出土をみるのはいつてしまえば複合経塚ということになり、築かれた時代より降る遺物が出土しても何ら不思議はない。しかし、ここでも何ら不思議はないという結論めいたことで物事を済すわけにはいかない。幸い、鞍馬寺には正嘉年間の銅燈籠が伝来している。正嘉2、3年といえば文応元年の前々年、前年ということに気づく。これは決して偶然の発見ではなく、これが銅燈籠制作の歴史そのものである。^(注1)

銅燈籠は火袋のみが正嘉年間のもので、他は江戸時代の元禄2(1689)年に鑄鉄製で補われたものである。材質の違いはあるが、バランスのよくとれた堂々とした燈籠といえるが、

ここではこのことは問題ではない。要は両者の年号の関連を追求することである。火袋は六角筒にして六区に仕切られ、その各区はさらに上中下の三段になっているが、そこに40名近くの名前が彫られている。40名のほとんどは制作にあたっての結縁者と考えられる。最終の仕上げが扉であったと予想されるが、扉の年号との関係から言えば、3年がかりでこの燈籠が制作されたと言うことになる。この扉は年と共に痛みがひどくなり、今みてもわかるように、本体に差しこむ柄出しが欠損した。これでは扉としての役をなさない。この燈籠が元禄の修理までの約430年間、どのような状態であったのか知る由もないが、修理の際に扉（現在のは昭和42年の修理の際に新調された扉を使用している）も新調されている。しかし、その元禄までの文応元年の扉が使用されていたとも思われず、何ら証明にたる史料はないが、使用不能となった扉の、そこには毘沙門天像が線彫りされているので、信仰上、廃棄処分にするわけにもいかず、田沢氏の言う「板仏」としての性格をもって室町時代に埋納されたのではなかろうか。埋納品のなかで文応の年号の次の年号といえは永正16(1519)年の銘のある経容器があるので、漠然と室町時代と考えたのである。このように毘沙門天像が刻まれていたことが、経塚に埋納する決定的な要因であったと考えたのである。その埋納が室町時代であったのか、鎌倉時代であったのかは判然としませんが、遺物のなかには文応前後のものが多いことも事実である。^(注2)

2.

鞍馬寺の経塚には幸いにも紀年銘の遺物が多く伝えられており、遺物についてはその紀年銘を手がかりとして、およその分類をすることも可能ではあるが、この経塚がどのような構造であったのか、出土状況など全くわかっていない。出土状況でもわかれば銅板扉がいつ埋納されたのかということもある程度わかるであろう。しかし今となってはどうしようもない。それでは押出仏の方はどのように考えたらいいのであろうか。これが本題である。押出仏の制作は7・8世紀に限られていたと言われており、この押出仏も8世紀のものと考えてまずまちがいない。これまでの研究では、押出仏の用途は寺院等の堂内の荘厳に用いられたとか、念持仏ではなかったかという説が有力であるが、伝来した数からの推定では念持仏と考えた方がいいようである。この経塚から発見された押出仏の制作された時期の用途はしばらくおくとして、ここではその時期に奈良の唐招提寺に住した鑑真を追ってみよう。縁起で鞍馬寺の開基とされている人物である。言うまでもなく唐招提寺は法隆寺と共にこの時代、押出仏の宝庫であった。^(注3) 何かの因縁である。因縁というのか、このことが以下のような結論をもつにいたる鍵となったのである。

鑑真は中国沂州の人で、有名な鑑真から天台学と戒律を修めた。奈良の東大寺で大仏開

眼の法要が華々しく営まれた翌々年、天平勝宝 6 (754) 年に師と共に来朝した。鑑真は天平宝字 3 (759) 年に唐招提寺を創建するが、鑑真はこの唐招提寺の戒壇で律義を弘め延暦年間に寂したと伝えられる、鑑真の高弟であった。ここでは唐招提寺に住したことを重視しているのである。その鑑真が師の歿後 7 年目の宝亀元 (770) 年に鞍馬山をめざすことになる。そのことはさきの『鞍馬蓋寺縁起』に詳しいので、その部分を読み下してみよう。

宝亀元年正月四日の夜のこと、奈良の唐招提寺にいた鑑真は、山背国北方の高山に霊地があるという夢をみた。夢がさめてから、その霊地を尋ねて行こうとしたが、ひとつの村まで来て日暮れになってしまった。日暮れとともに紫色の雲が北方の空にたなびいているのが見えた。翌日そのあたりまで行ってみたが、どこに霊地があるのかよくわからない。しばらく休息している間にうとうと眠りこんでしまい、夢をみた。その夢にりっぱな老僧が現われて「明日の朝、日の出のときに、東の方にすばらしいものを見せてやろう」と告げた。

夜が明けると、朝日の輝くなかに、宝の鞍を負った白馬の姿が蓋のようになって一つの山を覆っているのが見えた。鑑真は我を忘れて嶮難ものかは、懸命にその山の頂上までたどりついた。だが、そのとき白馬はすでに姿を消していた。山頂から少し下りた中腹に掌のような平たいところがあり、そこで柴を集めて焚火をしているうちに夜になってしまった。そこへ髪をふりみだして眼を雷光のように輝かせ、口から毒気をはきながら女のような鬼が現われた。鑑真は、驚き恐れながらも、錫杖をふるって鬼のもっている鉾を焚火のなかにたたきおとし、力いっぱい鬼の胸を突きさした。ところが鬼はびくともせず錫杖を噛みくだいてのみこんでしまった。鑑真は危険を感じてすばやく朽ちた大木の下に逃げかくれ、一心に神呪を唱え、朽木が倒れて鬼をおし殺した。

翌朝になると、そこには毘沙門天の像が現われていた。その像は青色でもなく、黄赤白のどの色でもない。金銀銅鉄のどれでもなく、しかも絵でもなければ彫刻でもない。そのうえ膚には温みがあるという実に不思議な像であった。「これは仏法護持の像がここに降臨されたにちがいない」と喜んだ鑑真は、さっそくこの地に草庵を結んで、その像を安置した。

と、『縁起』の上巻の第 1・第 2 段は言う。ここで唐招提寺の鑑真と鞍馬寺が結びつくのである。確証はないが、鑑真が鞍馬山をめざして旅立つ時に念持仏として「押出仏」を携帯したとは考えられないだろうか。当初はこのような欠損していたわけではなく、他の同型の押出仏などから類推して、縦はおよそ 23 cm 前後 (横 7.2 cm) であったと考えられる。上部に二カ所釘穴のようなものが穿たれているが、これは厨子の内部の板にうちつけた際の釘穴と思われる。厨子の多くは木製であり、時代とともに朽ちていき、それと共になか

の押出仏も欠損していったのであろう。経塚に埋納される時には現在のような状態となっていたのであろうか。これまでの押出仏は「経塚」という枠のなかで考えられていたようで、その制作された時期と鑑禎との関係については問われることはなかった。しかし、この関係が誤っている可能性もないわけではないが、この両者の年代はほぼ合致する。このように考えると、鞍馬寺と鑑禎、鑑禎と押出仏、押出仏と鞍馬寺という関係が一応成り立つのである。さきの銅板扉と同様、経塚が築かれる際に、やはり仏像が刻出されていたので埋納されたと考えられるし、それ以上に鑑禎の念持仏であったことから、私たちが今考えている以上に重要視されていたのかも知れない。埋納の時期は、現在のところ保安元(1120)年という紀年銘をもっている経筒が発見されているので、このころだと推定される。押出仏の時代から言えばおよそ350年が経過してからの埋納であった。保安元年のころと言えば、日本では仏教の世界が末法の世に入り盛んに経塚が築かれたピークの時期でもあった。釈迦にかわってこの世を救う弥勒の世まで經典や法具を伝えようとしたわけである。このころ、鞍馬寺には重^{じゅうい}怡という大徳がおり、時と人をえた時期でもあった。

3.

従来どちらかと言えば押出仏は経塚から出土したことの方が注目されてきた。経塚の研究からいえば当然のことである。勿論、ここで考えたような経過をもち、経塚に埋納されたのではないかという結論についても推定の域を出ない。しかし、今のところ押出仏にまつわる史料などは全くなく、一つの試みとして提起したのである。鑑禎が唐招提寺に住していなければこの仮説をたてなかったであろう。鑑禎が草庵を結んだという宝亀元年の20年後、都は平安に遷る。延暦15年に藤原伊勢人によって創建された際、『縁起』に言うことを信ずれば、そこには鑑禎の建てた草庵があり、これをベースにして堂塔伽藍が建立されたと考えられなくもない。ここで王城鎮護の寺としての性格を有することになったのである。このように、一個の、それも断片の資料であっても、このような重要な問題にせまる糸口になるのではないかと言うことである。経塚の出土遺物を整理していると、埋納用に制作された遺物とそうでないものに分類される。さらに、そうでないもののなかには築かれた時期と同時期のものとそうでないものがある。「押出仏」は築かれる以前の、「銅燈籠」は以後のものであり、いずれも埋納用に制作されたものではなかったわけであるが、今後は他の経塚についてもこうした調査を充分に行いたいものである。京都府下にも注目すべき経塚が築かれたが、そのほとんどが発掘によって出土したものではないことを思えば尚更である。

(難波田 徹＝京都国立博物館資料調査研究室長)

(注は44ページ)

昭和59年度発掘調査略報

1. 上 中 遺 跡

所在地 北桑田郡京北町大字赤石小字鳥谷小迫口16・17番地

調査期間 昭和59年8月1日～9月25日

調査面積 560 m²

はじめに この調査は、京都府立北桑田高等学校の林業科実習棟新築工事に先だち行ったものである。昨年度調査を行った南側台地の格技場からは、北方へ約200mの谷筋の平地にあたる。調査地周辺は、南側台地を含め遺跡立地により地形を成しているため、弥生時代前期及び後期～鎌倉時代にかけての長期にわたる土器・石器等が散布している。

調査概要 調査は、表土を重機により掘削し、表土下約40cmからは人力により掘り下げた。その結果、最終的に地山面まで精査を行ったが顕著な遺構は見つからなかった。対象地の西側には谷川が流れており、トレンチ中央より西側は氾濫原・湿地となっていたようで粘土・砂礫の堆積が認められた。また、トレンチ東側においては、樹枝状に延びる自然流路が認められたが、内部からは遺物は出土しなかった。その後、この西側の湿地部分は水田・畑地として利用するため、トレンチ東側の土砂を利用して埋めたようで、東側はかなり平坦化していた。それに伴い、昨年度調査で遺物包含層・遺構面となっていた黒色土は、東側では薄く、西側湿地部分では、上下2層にわたりその堆積が認められた。また、その後の水田・畑地利用に伴う水路・暗渠排水と思われる溝2条を検出したが、いずれも



調査地位置図 (1/50,000)

現在の畦・水路の区画方向とは異なり、北方向の谷筋に直交する区画を成していた。

遺物はほとんど出土せず、湿地部を埋めた黒色土から瓦器・磁器・須恵器片・剥片を極く少量検出した。

今回の調査では遺構・遺物等をほとんど検出できなかったが、調査と並行して行った周辺の遺物散布調査で、調査地南東約50m付近で多量の遺物を採取したことを考えると、調査地周辺が上中遺跡の北端と考えられる。(増田 孝彦)

2. 千代川遺跡第7次

所在地 亀岡市千代川町千原

調査期間 昭和59年6月1日～7月5日

調査面積 約 340 m²

はじめに 今回の調査は、府道（北ノ庄・千代川停車場線）の道路拡幅工事に先立って行ったものである。道路拡幅部分は総延長約 850 m（調査対象地約 3,400 m²）であるが、うち 2,500 m² を対象として昨年度調査を終了しており、今年度は残り 900 m² を対象として、幅約 3 m 内外のトレンチを5か所入れ、約 340 m² を掘削し調査を行った。

当地は、亀岡盆地の北西、行者山（標高 431 m）の北東麓に形成された扇状地上に立地している。当扇状地上には弥生時代～鎌倉時代にわたる複合遺跡である千代川遺跡が広がっており、その北半部には丹波国府推定地・桑寺廃寺が存在している。調査地は、この千代川遺跡の東端に位置する。

調査概要 昨年度の調査地は、扇状地上でも比較的安定した地勢を呈す台地状の部分にあたっており、桑寺廃寺に関する諸々の遺構・遺物をはじめ、弥生時代中期の集落跡や方形周溝墓、そして当地を国府推定地としての可能性をより高いものとする墨書土器などの奈良・平安時代の遺物が出土した。

今年度の調査地は、この東側に続く扇状地の縁辺部にあたり、約 1～1.5 m の段差をもって下がった部分である。

調査は、対象地内に5か所のトレンチを入れ掘削を行った。

（西から順に昨年度からの続き番号を入れ、第16～第20トレンチとした。）

土層は、耕土・床土の下に暗灰色砂質土・茶灰色砂質土・暗茶灰色土・黄灰色砂・黒灰色粘土・黄灰色粘土の順にみられた。各層とも遺物はほとんど含まれておらず、わずかに暗茶灰色土



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

中に弥生式土器が数点みられるにすぎなかった。そこで、暗茶灰色土上面までを重機によって除去し、それ以下を人力によって掘り下げた。

その結果、黒灰色粘土上面で弥生時代中期の溝状遺構2条（第16・第19トレンチ）と、同時期と考えられる足跡（第16トレンチ）を検出した。これらの検出状況から、当該地一帯に水田跡が広がっているのではないかと考えられたため、各トレンチにおいて精査をくり返したところ、平面的にはその痕跡（畦畔など）をとらえることはできなかったものの、トレンチの断面観察によって畦畔の痕跡と考えられる部分をいくつか確認することができた。



第2図 調査地全景（西から）

足跡は、第16トレンチで確認した溝（水路跡と考えている）の兩岸に群をなした状態で検出したもので、特に東側のものは、溝と平行に大人3人が北から南へ歩行している状態が確認できた。また、トレンチ断面で確認した畦畔と考えられるものは、幅約30～40cmの黒灰色粘土の高まりであるが、トレンチの幅が狭いことや平面的にこれらを確認することができなかったため、水田一面の大きさを推測することは難しい。ただ、水田がこの黒灰色土をベースにつくられ、調査地全域に広がっていたことは、ほぼ確実であろうと思われる。

ま と め 今回は、道路拡幅に伴う調査ということで、ごく限られた面積の調査にとどまり遺構の広がりなどを確認することはできなかった。しかし、昨年度の調査で同じ弥生時代中期の集落や方形周溝墓を検出したことと、今回確認した水田跡とを考え合わせると、当扇状地上には当時の居住地・生産地・墳墓という3つの性格の遺構群が連なって存在していることが明らかとなり、非常に貴重な成果を得たと言える。（森下 衛）

3. 千代川遺跡第8次

所在地 亀岡市大井町小金岐北浦
調査期間 昭和59年7月26日～8月30日
調査面積 約 370 m²

はじめに 千代川遺跡は、千代川町一帯に広がる亀岡盆地最大の弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡である。今回の調査は、昨年度調査を実施した千代川遺跡第4次調査と同様、京都府立丹波養護学校校舎新築に伴うものである。当調査研究センターでは、千代川遺跡第3次調査において、縄文時代から奈良時代に至る多数の遺物を含む大溝や古墳時代前期の住居跡等を確認しているが、その地点と今回の調査地が隣接している事などから、関連する遺構・遺物の存在が予想された。

調査概要 調査は、調査対象地である校舎建設予定地を重機により土層確認をしながら面的に掘削することから開始した。その結果、昨年度の調査で確認したものと同様の黒色土層を表土から約 50 cm 下位で確認したので、その面で精査し、遺構を検出した。遺構のすべては、黄褐色粘土層及び黄褐色から青灰色の砂質土の地山面を切り込んでいる中・近世の素掘溝とピット等であった。昨年度の調査では、奈良時代の掘立柱建物跡（2間×2間総柱倉庫）とそれに伴う素掘溝を検出したが、今回の調査地では、その面はすでに削平されており、鎌倉時代から近世にかけての素掘溝のみを検出した。素掘溝は、大きく中世のものと近世のものとに分けられる。中世のものは東西方向に走り、幅約 20 cm・深さ約 12 cm を測り、約 1.3 m 間隔で平行に施行されている。近世のものは、南北方向に走る幅広い溝であり、幅約 70 cm・深さ約 10 cm を測る。これらの素掘溝は、奈良・平安時代



調査地位置図 (1/50,000)

代に南北方向で施行されはじめ、鎌倉時代になると東西方向に変化し、幾度となくつくりかえられて、近世になると南北方向に変化する。また、近世までは畑地と考えられるが、現在では水田化している。これらの古代から近世に至る素掘溝の変遷は、耕作地の小地区画を知るだけでなく、亀岡盆地の条里制を知る上でも欠かせない重要な資料である。 (村尾 政人)

4. 篠・西長尾 A 地区作業場跡

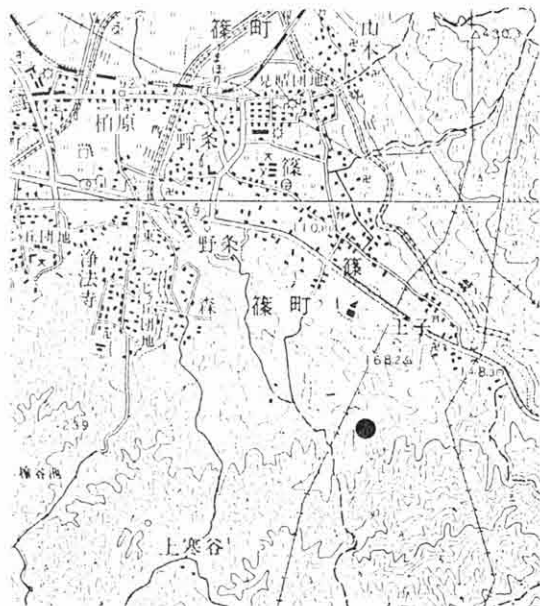
所在地 亀岡市篠町王子小字鍋倉

調査期間 昭和59年5月17日～9月7日

調査面積 約 860 m²

はじめに 丹波国の最南端に位置する亀岡市篠町・保津町の丘陵斜面には、数多くの窯跡が存在する。これらの窯跡は、大きく大堰川を境にして、左岸では瓦を生産する瓦窯が、また右岸では、須恵器や緑釉陶器を焼成する須恵器窯が点在する。特に大堰川右岸に広がる窯跡群を「篠窯跡群」と名付け、国道9号バイパス建設工事に先立つ発掘調査を、昭和51年度から京都府教育委員会と当調査研究センターが行ってきた。その結果、古墳時代末期から平安時代後半までの窯跡が、約100基以上存在する大規模な生産遺跡であることが判明している。

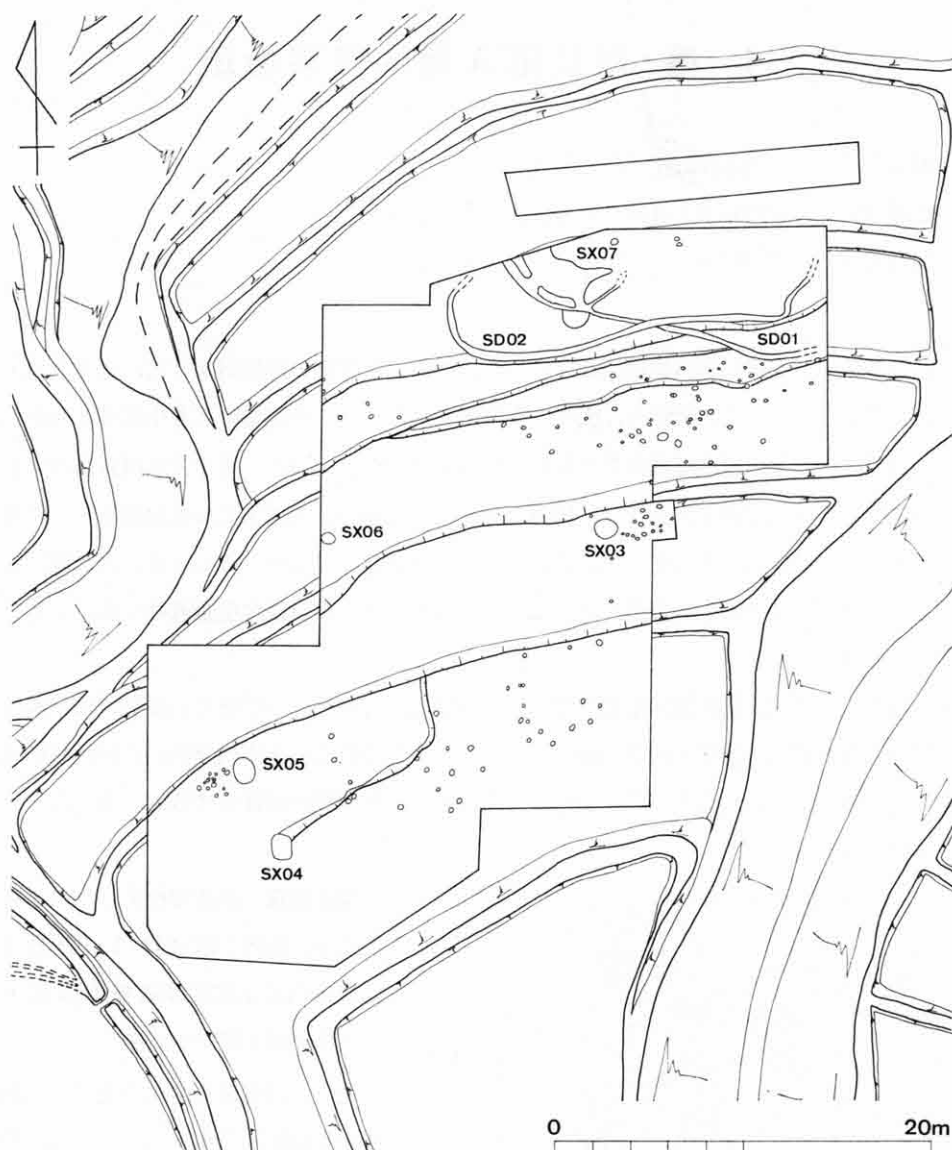
今回報告する西長尾A地区作業場跡は、昨年度試掘調査を行った際に、多量の須恵器片を投棄した土坑状の遺構と柱穴を検出しており、また調査地の北東約80mに西長尾C地区作業場跡があり、地形もよく似ていることから、作業場跡が存在するものと考えられ発掘調査を実施した。



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

検出遺構 調査で検出した主要な遺構は、柱穴と溝 (SD 01・02) と性格が不明な土坑状の遺構 (SX 03・04・05・06・07) である。

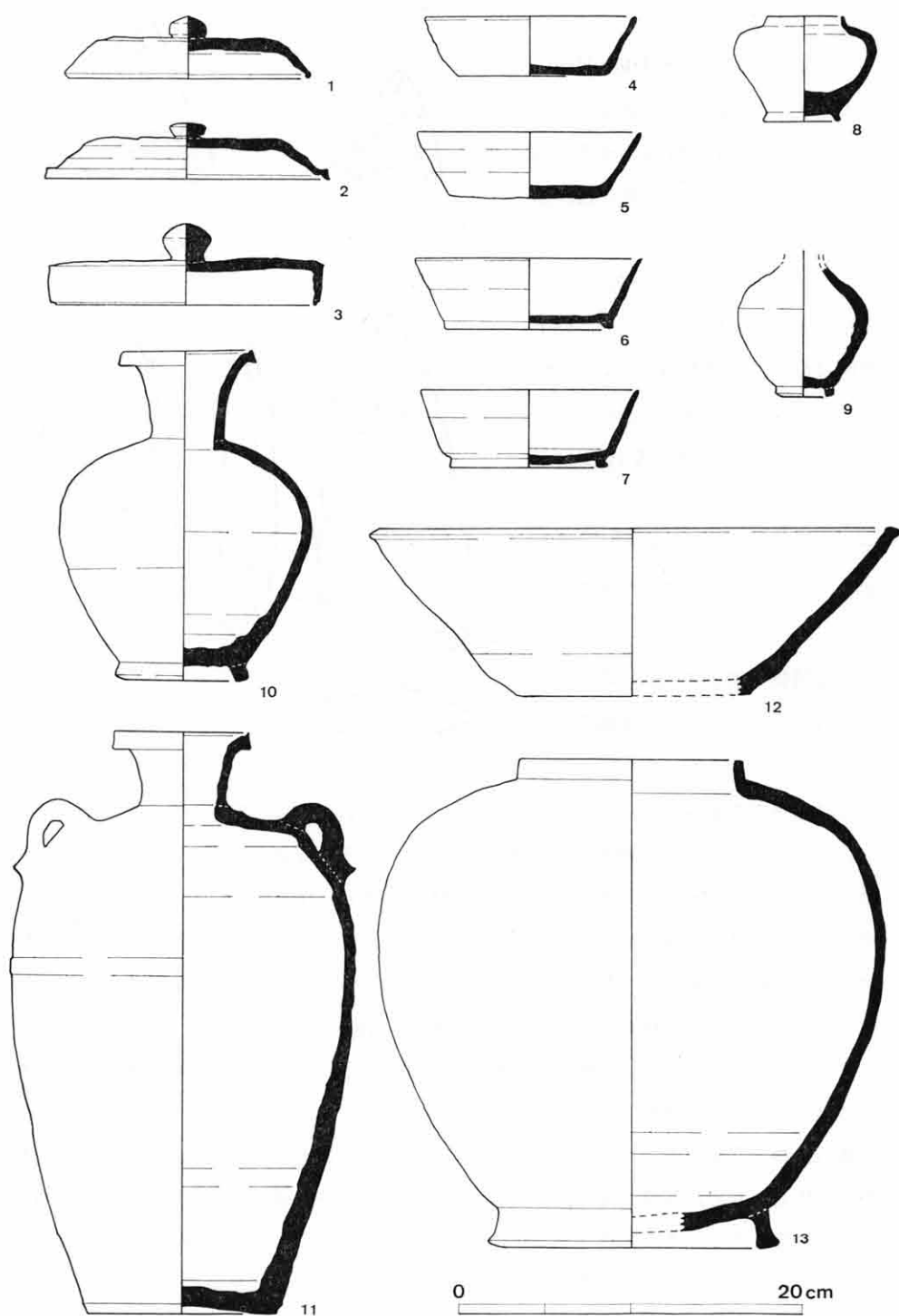
柱穴 調査地の南側と北側から約120個の柱穴を検出した。径は、約10～20cmで、深さは60～70cmのものもあれば、浅いものもある。柱穴出土遺物の大半は、芦原1号窯や西長尾1・2号窯出土遺物に類似しており、この平坦地上には9世紀中頃に、建物や柵列があったと思われる。現在、出土遺物や図面の整理作業を行っているため、建物などの規



第2図 篠・西長尾 A 地区作業場跡調査図

模は検討中である。

溝 (SD 01・02) 「コ」の字に曲がる溝で、調査地の北端で発見した。溝 (SD 01) 内からは、9 世紀中頃の遺物が出土している。溝 (SD 02) は、溝 (SD 01) よりも新しいが、その時期については、検討中である。これらの溝の性格については、明らかではないが、緑釉陶器片が調査地北端に集中することから、調査地北側の平坦地上には、10 世紀中頃の作業場跡があったものと思われ、溝 (SD 02) は、建物を囲むように山手に設けられた排水用の溝と考えられる。しかしこのあたりは、後世にかなりの削平を受けており、溝や柱穴



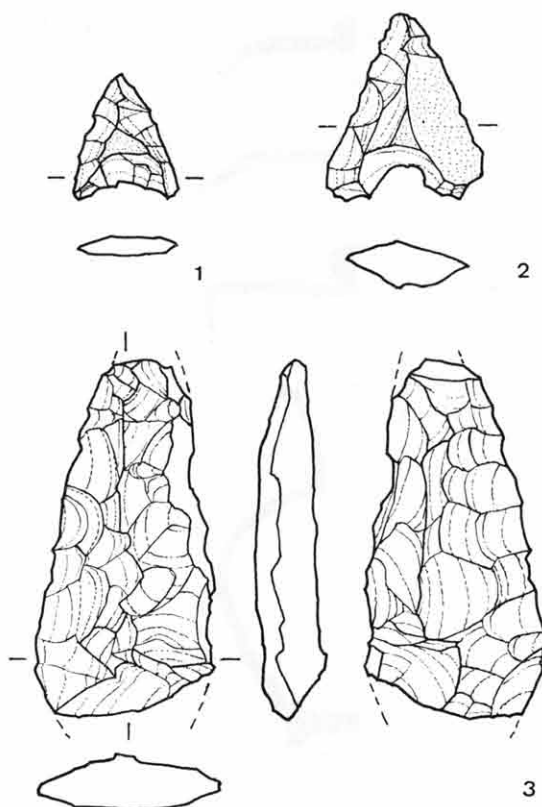
第3図 SX 04 出土遺物実測図

は検出できなかった。

土坑状遺構 (SX 03・04・05・06・07)

現在のところ、その性格は不明である。SX 03・05・06 は、径 1.2 m 程の円形の遺構である。底には、焼土や炭が堆積しており、9 世紀中頃の遺物が出土している。SX 04 は、試掘調査時に発見したもので、焼土や炭はなく、東西 1.0m・南北0.9m の土坑状の掘り込みに土器を投棄したものである。SX 07 は、SD 01 にある一定以上になると水が流れるようになっていることから、水を溜めるための、土坑であったと考えられる。

出土遺物 現在整理中であるため、SX 04 出土の須恵器を紹介することにした (第3図)。



第4図 石器実測図 (実物大)

蓋はすべてつまみを有し、平坦な天井部から「く」の字状に屈曲する蓋(1)と、「S」字状に屈曲して口縁部に至る蓋(2)と、口縁部が垂直に下がる短頸壺の蓋(3)が出土している。杯は、平底のもの (4・5) と高台を有するもの (6・7) がある。(7)は、(6)よりもわずかに内側に高台を貼り付けている。(8)は、短頸壺のミニチュアで、肩部がかなり張っている。瓶子(9)は、肩部が張り丸味を帯びたものである。大型品としては、高台を有する壺(10)や、外上方にまっすぐ立ち上り口縁端部の平坦な鉢(12)・双耳壺(11)や、短頸壺(13)が出土している。

これらの須恵器以外に、尖頭器や石鏃なども採集している(第4図)。尖頭器(3)は、欠損しているが、有舌尖頭器であった可能性がある。

まとめ 発掘調査を行った結果、舌状にのびる平坦地部分で、9 世紀中頃の柱穴を数多く検出したため、作業場跡であると考えられるが、現在整理中であるため、今後検討した上で報告したい。また、堆積土内に10世紀中頃から11世紀頃の須恵器片も発見していることから、未発見の窯が、調査地の南側近辺にあるものと考えられる。

(岡崎 研一)

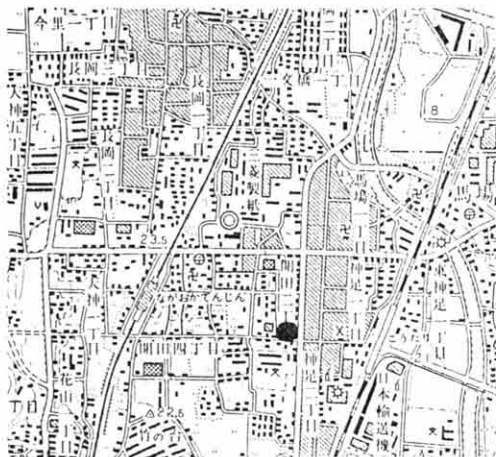
5. 長岡京跡右京第165次（7 ANKSM-3 地区）

所在地 長岡京市開田2丁目
調査期間 昭和59年5月21日～6月14日
調査面積 約 50 m²

はじめに 今回の調査は、府道開田・神足線交通安全施設設置工事に伴い実施したものである。調査地は、長岡京跡の西一坊大路の推定地に当り、南側の神足小学校の体育館改築工事に伴い長岡京市教育委員会が実施した右京第77次調査では、東西両側溝が検出されている。また、調査地のすぐ北側を五条大路が走り、右京第11次調査及び第96次調査によって確認されている。このほか、近辺の調査では、長岡京期の井戸や掘立柱建物跡などが多く検出されている。今回の調査においても、長岡京期の遺構、特に西一坊大路の側溝を検出することが期待された。

調査概要 調査は、隣接地への出入口の確保等から、右京第77次調査の成果に基づき、東西両側溝の存在が予測される所に、幅約 2.2 m・長さ約 10 m のトレンチを2か所入れ、西を第1トレンチ、東を第2トレンチとした。盛土・耕作土等を重機で除去し、以後人力で掘削にはいった。床土の下には、薄く遺物包含層が存在し、長岡京期頃の遺物が出土した。この包含層を除去したところで黄色粘土の地山となり、この面で西一坊大路の東西両側溝や土壇・ピット等を検出した。

第1トレンチでは、西一坊大路の西側溝となる SD 16503 や長岡京期の土壇 (SK 16501)・



第1図 調査地位置図 (1/25,000)

ピットなどを検出した。第2トレンチには近世や近・現代の攪乱がトレンチ東端部や西端部に存在したが、トレンチ中央で西一坊大路の東側溝である SD 16507 を検出した。SD 16503 は、幅約 1.0～1.1 m・深さ約 0.3 m を測り、暗褐色粘質土で埋り溝底に薄く砂層の堆積がある。遺物はこの砂層の上面でまとまって出土した。溝の東西の傾斜面には、径 0.15～0.25 m のピットがほぼ対応するように並んでいる。溝の護岸ないしは橋状の遺

構と思われる。SD 16507 は、幅約 1.0~1.1 m・深さ約 0.3 m を測り、暗褐色の粘土質と砂質土で埋り、砂が間層として存在する。遺物は、溝の上層から大半が出土し、下層からの出土は少ない。この点で、溝底近くから大部分の遺物が出土した SD 16503 と様相を異



第2図 SD 16503 (西一坊大路西側溝) (北から)

にする。また、SD 16503 の東西の傾斜面にあったピット列は存在しない。

このほか、SD 16503 の西側及び SD 16507 の東側には、溝の肩から約 1.0 m 離れてピットが存在する。埋土は、SD 16503 などと同様であり、あるいは町境の柵列の柱穴の一つとも考えられる。また、第1トレンチの北西隅で検出した SK 16501 は、深さ約 0.15 m の浅い不整円形の土坑で、暗褐色粘質土で埋り、長岡京期の土器が出土した。

遺物は、SD 16503・16507 や SK 16501 から、土師器の杯・碗・皿・蓋・甕や須恵器の杯・皿・蓋・壺、製塩土器、瓦などが出土した。土師器の杯や碗は、外面篋削りのものや、口縁部外面に横なでを施し、他を篋削りしたものが多く見られる。

まとめ 今回の調査では、右京第77次調査で検出された西一坊大路の東西両側溝の北の延長を確認することができた。特に、西側溝と考えられた SD 7709 の延長である SD 16503 を検出したことは大きな成果であり、右京第77次調査で指摘されたように、大極殿心からの割付心に西側溝が存在し、道路の中軸が割付心からずれることは確実であろう。また、東西両側溝における遺物の出土状況は、それぞれ異なり、その埋積過程に差があったことが示されている。

最後に付記しておく、西側溝を検出した調査地は、中山修一氏が条坊地割の遺存に初めて気づかれた土地でもある。

(山口 博)

注 西一坊大路東西両側溝の国土地標値は次のとおりである。

SD 16503 (西側溝) X = -27, 373, 4

SD 16507 (東側溝) X = -27, 348, 5

6. 平安京跡右京一条三坊九町（山城高校第6次）

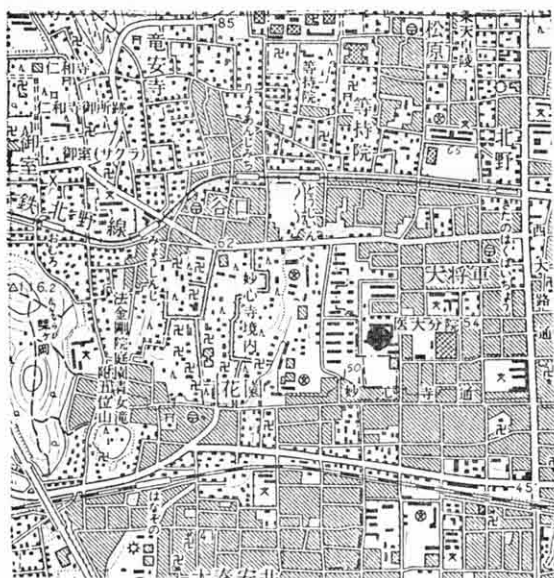
所在地 京都市北区大將軍坂田町
 調査期間 昭和59年7月19日～8月30日
 調査面積 340 m²（立会調査分は含まず）

はじめに 調査地は、現在府立山城高等学校の敷地となっているが、平安京跡の右京一条三坊九町の全域と十町の北半分に当る。ここでは、昭和54年度および55年度に校舎の増改築に伴う発掘調査が実施され、正殿・脇殿を有した寝殿造の原形とも言える平安時代初期の建物跡をはじめとして、数多くの遺構が検出された。そのうち、主要建物部分は、京都府の史跡として指定・保存されている。今回の調査は、校舎建物の周囲に雨水・汚水等の排水管が設置されることとなり、その施設部分を発掘及び立会調査したものである。

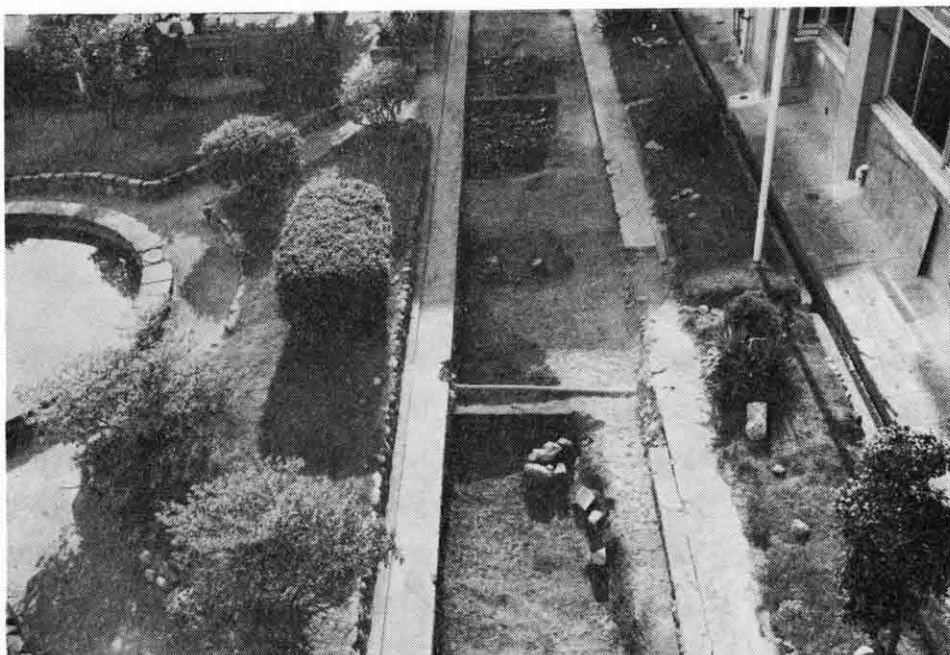
調査概要 調査は7月19日から着手し、配管工事の幅で計8本のトレンチを入れ、残りの部分については、8月30日の発掘調査終了後立会調査を行っている。検出した遺構には掘立柱建物跡・溝・土坑等がある。遺物は、平安時代前期のものが中心であり、少量ではあるが古墳時代のものも含まれている。なかでも、中庭に入れた第6トレンチで検出した東西方向の溝（SD 0605・0606）は、昭和55年度調査で検出された宅地内側の溝とされる

SD 45 の延長部分と考えられるが、

溝中、特にSD 0605 からは、多量の土師器・須恵器・製塩土器・瓦類等がまとまって出土した。それらの土器類は、溝が半ば埋った後に棄てられ、埋土中には炭片が多く混っていた。邸が廃絶した際に一括して投棄されたものであろう。また、九町の南半部に当る第1・2・3トレンチでは、邸宅内を区画する溝や、方位等から奈良時代と考えられる掘立柱建物跡、古墳時代末の遺物が出土した土坑等を検出した。これらのトレンチでは、邸の園池の遺構も期待さ



第1図 調査地位置図（1/25,000）



第2図 SD 0605・0606 遺物出土状況(西から)

れたが、今回の調査では検出されなかった。

その他、第7・8トレンチでも、東西方向の溝を検出した。このうち第8トレンチで検出した溝は、南北両肩ともトレンチ外にあり、北へ延ばした小トレンチで北肩の一部を確認したものである。南肩は埋設管によってすでに削られていた。この溝からは、平安時代の土器や瓦等が出土するが、やはり平安時代と思われる瓦が多量に存在する土壇を削って作られている。

ま と め 今回の調査では、工事対象の性格上トレンチが極めて狭小なものであったため、溝をはじめ建物跡と考えられる柱穴の並び等も、その全体像を把握できるものはなかった。しかし、SD 0605 でまとまって出土した平安時代の前期の遺物は大きな成果である。また、寝殿造建築では邸地の南に池を配するが、第1・2・3トレンチ等の調査結果からは、邸地の南に池がまだ存在しなかったことを窺わせる。

(山口 博)

資料紹介

亀岡市与野廃寺採取の古瓦

はじめに 与野廃寺は、亀岡市曾我部町大字寺小字坊垣内に所在し、大堰川の西岸、竜ヶ尾山（標高 413 m）の西麓に位置している。当地は、その前面に曾我部町一帯の平地部が一望できるという標高 140 m 前後の比較的高所にあたり、周辺には古墳時代後期の群集^{（注1）}墳や式内社である与野神社がある。また古くから兵庫県池田方向へ通じるルート上にあたり、交通の要衝としての位置も占めている。特に、当廃寺跡を南面の伽藍配置と考えた場合、兵庫方面からは当寺を正面からのぞむこととなる。

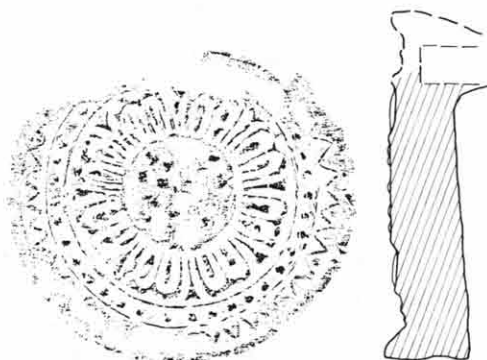
しかし、現在では寺院跡の存在を示すものは、周辺から採取できる数点の古瓦類のほかには、当地から南へ約 500 m 離れたところにある与野神社にかつて出土した礎石や藤原宮式とされる軒丸瓦などが保管されているにすぎない（第 1 図）。

今回、ここに紹介する資料は、偶然、当廃寺跡を訪れた際に採取した軒平瓦 2 点である。以下、その観察記録と若干思うところを述べたい。

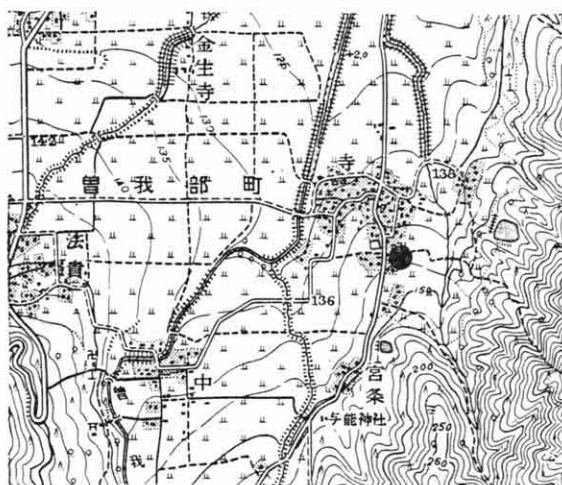
なお、この軒平瓦は、現在亀岡市立図書館において保管されている。

採取の古瓦（第 3 図） ここに示した 2 点の軒平瓦は、与野廃寺の中心部であつたろうと言われている与野神社の御旅所周辺で、農業用水路から掘りおこされていた排土中から発見したものである。また、採取したのは、この 2 点のみで、ほかにみつかることはできなかった。

（1・2）とも同一文様を有していると考えられ、焼成は堅く、暗



第 1 図 軒丸瓦実測図（約 1/4）



第 2 図 与野廃寺位置図（1/25,000）



第3図 軒平瓦実測図

灰色を呈す点も共通しており、同一個体の可能性もある。

(1)は瓦当面向って右から左へ反転する偏行唐草文を内区主文とし、上外区に珠文、下外区に線鋸歯文を配すもので、向って左側面を残している。しかし、破片のため唐草文が何度反転するのか判断できない。

文様は、中央を右から左へ流れる茎から分離した形で各支葉がみられ、支葉は深くまきこんでいる。しかし、瓦当の大きさと瓦範の大きさがずれているようで文様が端部付近で切れており、文様面も浅くあまり深く範がおしつけられていないようである。

遺存している平瓦部をみると桶巻きづくりによるものと考えられ、^(注2)凹面には布目(8×7/cm²)がみられ、瓦当(広端部)に沿って1~2cm幅で横方向の削りが施されている。凸面は遺存部が少なく不明である。また、側面部分も削りによって整形されている。

顎部は、粘土帯を貼りつけてつくられており、縄叩きを施した後、横方向の粗いなでにより仕上げられている。

(2)は(1)と同一個体かと考えられ、文様・技法上の特徴も共通している。

この軒平瓦は、文様構成をみると藤原宮式(中でも平城宮6641型式系)^(注3)の範疇に入れることができるだろう。しかし、偏行唐草文が右から左へ反転する点、通常のものとは逆になっている。このことは、もともと製品としての粗形があり、それを模倣し範を作成した結果、生じたことと考えられる。

また、顎部にみられる縄叩き痕や、瓦当文様が浅く、瓦当部とずれていることから、平瓦がまだ桶に巻かれている段階で顎部がつくられ、さらに瓦当文様も作成された後、分割されたものと考えられる。

まとめ 以上、採取した軒平瓦について観察した事項を述べたが、以下思うところを簡単に述べまとめとしたい。

今回採取した軒平瓦は、先に述べたように藤原宮式と呼ばれるものの範疇に入るものであり、以前採取された軒丸瓦とセットとなると考えられる。

藤原宮式軒瓦については坪ノ内徹氏の論考がある。^(注4)氏は、この種の軒瓦の分布を「藤原宮造営に際して畿内周辺地域からあつめられた陶工をも含めた造瓦技術者が任を終えてそれぞれの国に帰り、宮造営で習得した技術とともに宮に使用された軒瓦の文様を本貫地で

の生産活動に活かした結果、藤原宮式軒瓦の分布を生じさせることになったのである。」と述べておられる。

当廃寺跡の軒瓦をこれにあてはめた場合、少し離れるが篠窯跡群が存在することは、宮造営に際してあつめられた陶工というものと考え合わせ興味深いものだが、篠町に所在する観音芝廃寺の軒瓦と合わせて今後充分検討する必要性があろう。

さらに問題なのが、坪ノ内氏が別稿^(注5)で指摘しておられるように、従来単に藤原宮式とされているものの中に、実は本薬師寺でしか出土せず、「本薬師寺式」の類に入れるべきものが存在することである。氏は、本薬師寺式の代表例として、平城宮6276型式の軒丸瓦と同6641H型式の軒平瓦がセットで紀伊方向に多く分布していることを示しておられる。

今回の軒平瓦も、断片なのでよく分からないが、細かくみると平城宮6641型式系の中でも、6641H型式の左右逆転したものの可能性が高く、以前に採取されたとされる軒丸瓦の方も、中房部がやや大きい点など6276型式に類似しており、紀伊方面の本薬師寺式軒瓦の分布のあり方と類似しているようである。

今後、より良好な資料の増加を待って充分な検討を行わねばならないが、一応当廃寺の軒瓦のセットが、単に藤原宮式と言うより、本薬師寺式のセットとしうる可能性のあることを指摘しておきたい。

なお、本稿の作成にあたっては、亀岡市教育委員会樋口隆久氏、京都学園大学 OB 榎康史氏に諸々の面でお世話になった。記して感謝したい。 (森下 衛)

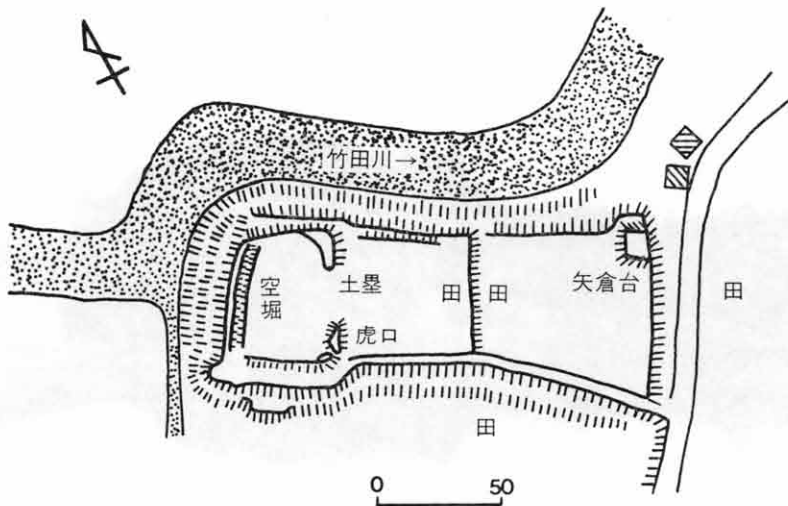
注1 近年、京都学園大学考古学研究会の踏査によって発見されたもので、与野神社背後の丘陵部に分布しており、南条古墳群と呼ばれている。

注2 粘土板によるものか粘土ひもによるものか判断できなかった。

注3 『飛鳥・藤原宮発掘調査報告書Ⅱ』(奈良国立文化財研究所学報 第31冊) 奈良国立文化財研究所 1978

注4 坪ノ内 徹「藤原宮武軒瓦とその分布」(『日本書紀研究』第11冊) 1978

注5 坪ノ内 徹「畿内周辺の藤原宮式軒瓦」(『考古学雑誌』68-1) 1981



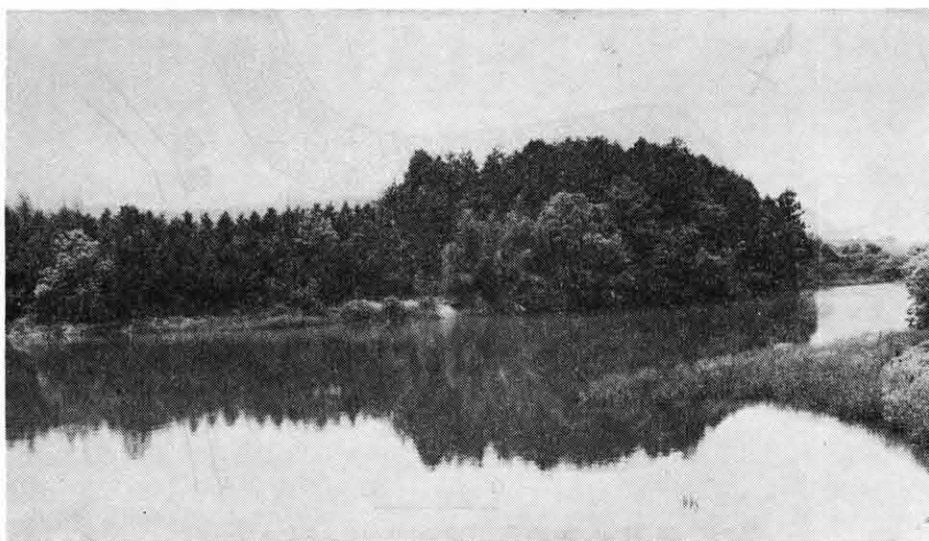
第2図 田野城跡略図（『福知山市史』より再トレース）

を批判している。『福知山市史』では『丹波志』の記述を信用して、悪右エ門が中六人部に侵入し、「兎ノ木縫殿助を亡ぼしたのを永禄年間（1558～1569）と推定している。しかし、「兎ノ木縫殿助」が小野木重勝でよいとすれば、『福知山市史』の説は成立しない。事実、小野木重勝は、関ヶ原の戦いで福知山城主として西軍に属したため、細川忠興に攻撃されて捕えられ、丹波亀山で切腹させられている。従って、『丹波志』の記載は何かの誤解に基づいて記述されたものと言えよう。

ところで、小野木氏の菩提所とみえる「大内後青寺」は、江戸時代には池田の来迎院に合併され、廃絶したと伝える。しかも、来迎院には小野木氏の関係の遺品は伝存しないということである。この「後青寺」については、当調査研究センターが近畿自動車道舞鶴線関係遺跡の一つとして昭和56年度に発掘調査を実施している。調査では建物の存在を示すような遺構はみつからなかったが、調査前に小人頭大の石材が転がっていたのを確認しており、これらの石材を台石にしたような建物があった可能性も指摘できる。また、土塁の調査も行っており、土塁の南辺下方から幅約1mほどの空堀も検出された。これらのことやこの地の小字名が「後青寺」ということから、この地が『丹波志』にみえる「後青寺」の跡と考えられる。

なお、小野木縫殿助重勝が福知山城主となって以後の田野城については、史料が残っておらず、詳しいことは知りえない。ただ、田野城の位置が軍略的にすぐれていても、政務をとるにはあまりふさわしいとは言えず、また、その規模も比較的小さいため、重勝が福知山城へ移って後は廃城になったのかもしれない。現在は、本丸跡以外、田園地帯となっており、往時のおもかげはただよっていない。

（土橋 誠）



第3図 田野城跡遠景(北から)

参考文献

『日本城郭大系』11 新人物往来社 1980

『福知山市史』第2巻 1982

辻本和美ほか「近畿自動車道舞鶴線関係遺跡昭和56年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』
第1冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982

23. 亀岡市大堰川西岸の中世城跡

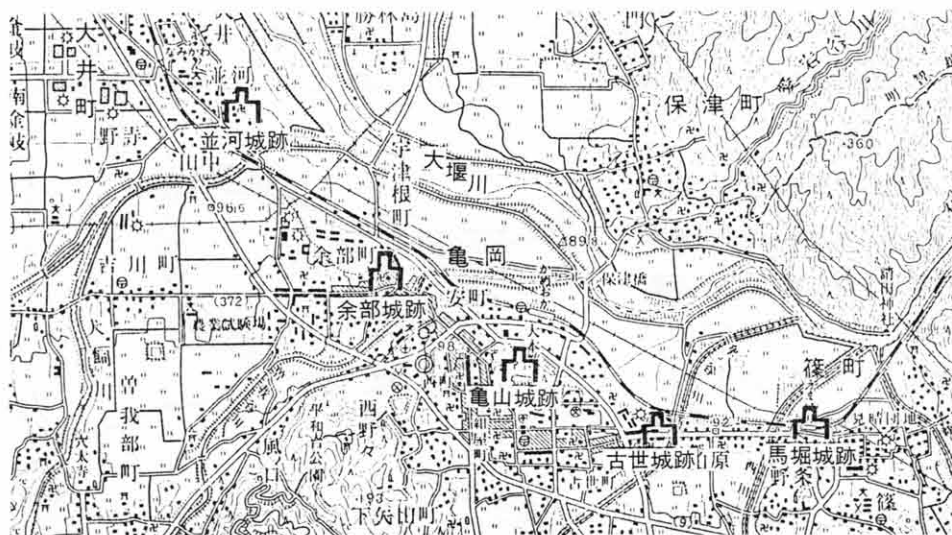
大堰川は丹波山地を水源とし、亀岡盆地の中央を北から南へ貫流し、京都盆地へ出て桂川となる。亀岡盆地を東西に二分する大堰川の両岸は河岸段丘となり、標高100 m前後の平地が広がっている。大堰川西岸の河岸段丘縁辺部には、中世の城跡が点在する。東岸には城跡はないが、これは当時の山陰道が西岸を通っていたからであろう。

1. 並河城跡

大井町並河に所在する。現在、本丸跡は一段高い竹藪となって残っている。また、大堰川支流の一つである願成寺川の流路や、堀跡とみられる一段低くなった田畑の状況から、城跡の輪郭が推定できる。この城の城主は、並河氏と伝えられ、天正年間（1573～92）の明智光秀の丹波征伐の時には明智方に組し、織田信長から所領を賜わったとある。築城年代は不明である。

2. 余部城跡

余部町古城に所在する。現在は、民家が建ち並んでいるが、堀跡とみられるものが所々に残る。築城年代は不明であるが、天正頃の城主を福井氏と伝える。丹波征伐の時には明智方に組せず、それがために明智軍に攻められ、城主以下ほとんどが自害・討死し、落城した。なお、この城には初期的な天守閣が備わっていたことが、『桑下漫録』の「亀山由



第1図 城跡位置図 (1/50,000)

来記」の記事からうかがわれる。

3. 亀山城跡

荒塚町に所在する。現在残る城跡は、江戸時代亀山藩の藩庁であった近世城郭としての亀山城のものである。近世亀山城は、天正年間に明智光秀が、中世亀山城を拡張・整備し、その後次々と手が加えられて完成したものであるが、中世亀山城については、築城年代などの詳しいことはわからない。『亀山城地録』によると、永正8（1511）年頃には、城郭と



第2図 並河城跡平面図

しての形態が整っていた様子で、城主は並河氏と伝える。また、『桑下漫録』の中の「丹陽軍記」によると、明智光秀の丹波征伐前後の時期の城主を内藤氏と伝える。丹波守護代である八木城主内藤氏に関係するものか。

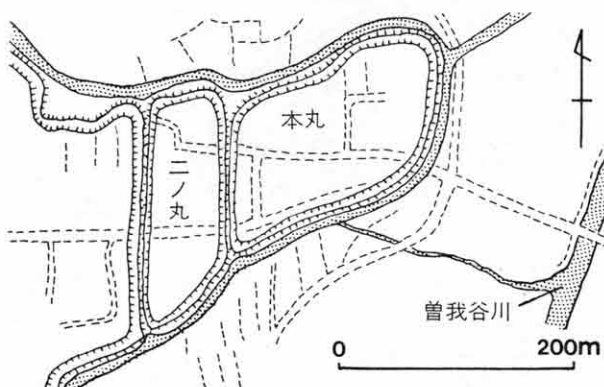
以上のような状況であり、現在残る亀山城跡の遺構のなかから、中世亀山城に関係する遺構を判別することは、現状では困難である。

4. 古世城跡

三宅町に所在する。築城年代・城主ともに不明である。現在、大堰川支流の年谷川左岸に、住宅地に比して、かなり低くなった水田があるが、堀跡とみられる。近世には、亀山城下の京口として外堀がめぐっており、あるいは、それと重複するものか。いずれにしても、現在城域のほとんどが宅地となっており、郭の配置などについては不明な点が多い。

5. 馬堀城跡

篠町馬堀に所在する。国鉄山陰線馬堀駅は、馬堀城跡本丸北側の郭にあたる。馬堀駅南側の高台が本丸にあたる。堀跡とみられる一段低くなった田畑の状況から、城跡の輪郭がうかがわれる。また、本丸南側には、内堀跡の名残りともみられる小溝がある。築城

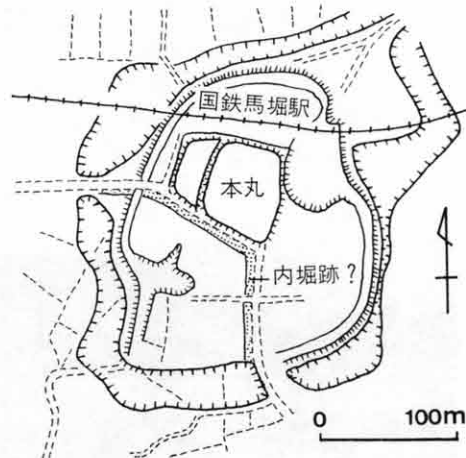


第3図 余部城跡平面図

年代は不明であるが、天正年間頃の城主は山田氏と伝えられる。

大堰川西岸の城跡の概略は以上のとおりである。これらの城跡に共通することは、まず、すべて平城の形式をとることである。どの城跡も、本丸が広く、平時の居住地にもなっていたものであろう。

つぎに、これらの城は、大堰川およびそれに沿った沖積低地の湿地を要害として取り入れている。そのため、これらの城の東



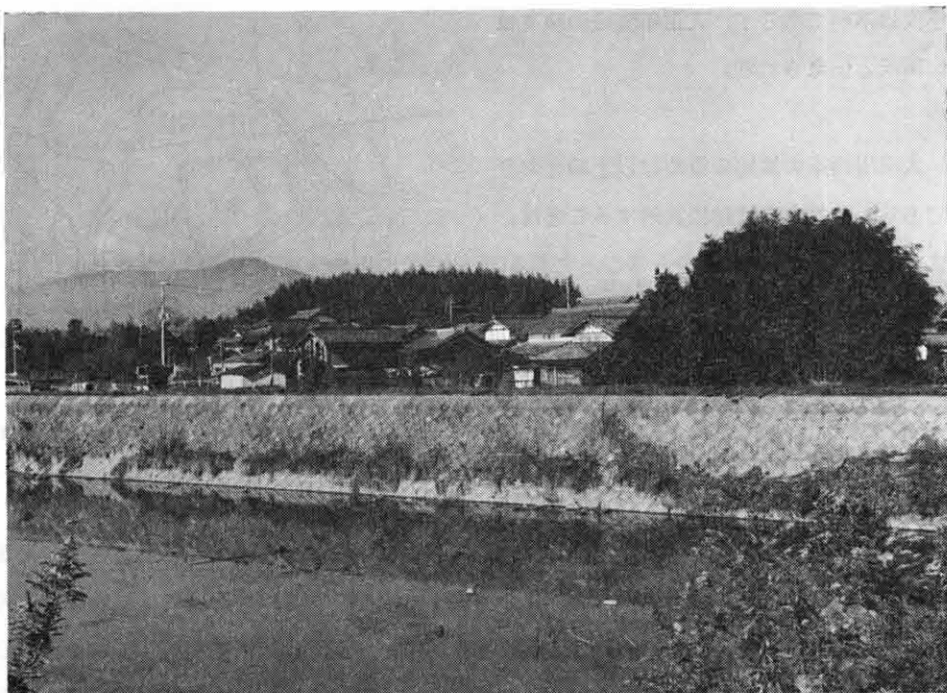
第4図 馬堀城跡平面図

側もしくは北側は、人工的な防御施設がほとんど不要になる。また、これらの城は、大堰川とその支流の合流点付近に位置し、その支流をも要害とする。並河城では願成寺川と犬飼川、余部城と亀山城は曾我谷川、古世城は年谷川、馬堀城は西川を利用している。このことによって城の防御能力はさらに高くなり、逆に攻撃する側からすれば攻めにくくなる。

このように、河川や低湿地を城に取り入れるということは、大堰川の水上交通をも、その手中にすることになる。並河城跡には舟溜りかとみられる遺構が本丸直下に残っているが、これは、どのような状況のもとでも水運が利用できるようにしていた名残りか。その当時、水上交通が、現在考える以上に重要な交通手段であったことをおもえば、これは重要な意味をもつ。また陸上交通においても、これらの城は、山陰道の付近に位置したり、山陰道を城下に取り込む状況がみられる。このように、これらの城は水陸ともに交通の要を扼する位置にある。

以上のように、これらの城は、居館を兼ねた平城であり、自然地形を利用して合理的に防御され、水陸交通の要所を占めるという性格をもつ。この性格は、そのまま近世亀山城へ受け継がれる。城主の威を示す政庁・居館として、戦略的拠点として、亀岡盆地内では大堰川西岸地域が最もふさわしい場所であるといえよう。その意味では、これらの城は、中世の城でありながら近世の城に近い性格を持つ城といえる。

最後に、これらの城は、築城時期は明らかでないが、天正年間頃には、そのほとんどが城として機能していたとみられる。あまり広いとは言えない大堰川西岸地域に、これらの城が並存し得た背景には、かなり複雑な状況があると思われる。史料がほとんど残っていないので、その勢力関係については不明であるというほかはない。古くから丹波は都の後背地として重要視されてきた。まして亀岡は都に隣接する要地である。天下に覇を唱えよ



第5図 並河城跡（南東から）

うとする者にとって、この地をおさえることは重要なことであった。古くからの勢力が新しい勢力に取ってかわられる、それがくり返される戦乱の時代に、大きな勢力になり得ないこれらの小規模な城の城主は、領地確保と保身のために、大きな勢力の間でゆれ動いていたことだろう。最初は地方的な勢力争いであったものが、戦国時代後期になると全国的なものとなり、織田信長が出現するに及んで全国統一の気運がみえはじめる。丹波へは、平定の総大将として、その配下の明智光秀が派遣される。それまで、何らかの勢力均衡によって並立していたこれらの城の城主たちは、あるものは大きな勢力にのみ込まれ、あるものは一族全滅してしまう。今、その跡は民家の下に埋もれ田園となり、わずかに昔日のおもかげをとどめるのみである。

（引原 茂治）

参考文献

『日本城郭大系』11 新人物往来社 1980

『丹波笑路城跡発掘調査報告』（亀岡市文化財調査報告書 第7集）亀岡市教育委員会 1978

永光 尚『新編桑下曼録』南郷書房 1984

長岡京跡調査だより

夏から秋にかけて、いよいよ長岡京跡の調査件数も増加しており、7月から9月の3か月間に行われた調査は、宮内1件、右京域15件、左京域4件の計20件を数える。特に右京域での調査が目立っている。また、そのほかに乙訓地域では、修理式遺跡や物集女車塚古墳・長法寺南原古墳の調査も実施され、それぞれ成果が上がっており、長岡京連絡協議会でも報告されている。以下、7月25日・8月22日・9月26日に行った長岡京連絡協議会で報告された調査のうち、主だったものについて略記する。

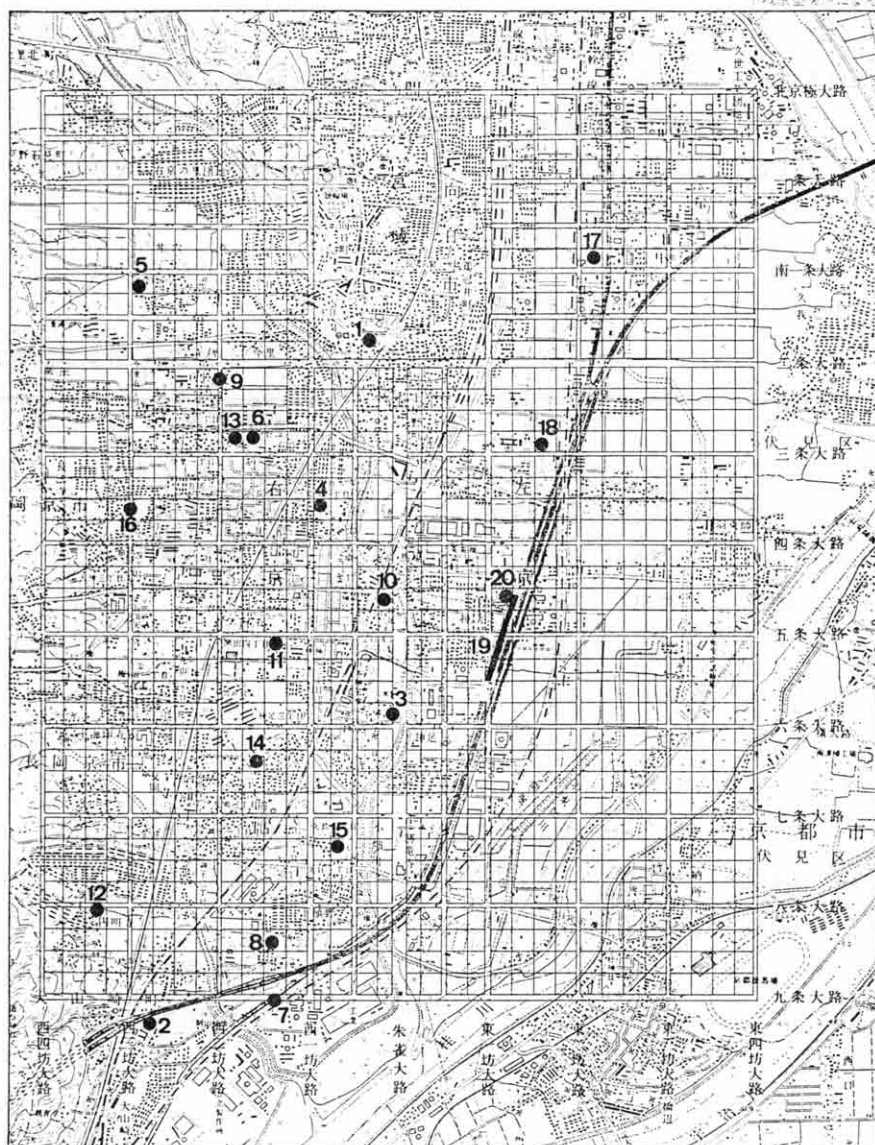
右京第159次 (2) | 大山崎町教育委員会

現西国街道とほぼ平行して走る平安時代前期の溝が2条検出さ

調査回数	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第150次	7AN15M	向日市上植野町御塔道7-12	向日市教委	59. 6. 1 ~ 7. 12
2	右京第159次	7ANSDD-2	大山崎町円明寺百々1	大山崎町教委	4. 10 ~ 7. 15
3	右京第163次	7ANMKI	長岡京市東神足2丁目15	(財)長岡京市理	5. 28 ~ 8. 31
4	右京第166次	7ANIMI	長岡京市一文橋1丁目13-1・4	〃	6. 18 ~ 7. 25
5	右京第167次	7ANGHD-3	長岡京市井ノ内広海道 ¹⁵⁻¹ ₁₆₋₁	〃	6. 27 ~ 7. 20
6	右京第168次	7ANIFD	長岡京市野添2丁目115-1他	〃	7. 19 ~ 8. 24
7	右京第169次	7ANTGT	大山崎町下植野五条元	大山崎町教委	7. 9 ~ 7. 23
8	右京第170次	7ANTTD	大山崎町下植野寺門	〃	7. 24
9	右京第171次	7ANITT-10	長岡京市今里4丁目	(財)京都府埋	7. 9 ~
10	右京第172次	7ANMSL-2	長岡京市東神足1丁目-1	(財)長岡京市理	7. 23 ~ 8. 1
11	右京第173次	7ANKHT-3	長岡京市開田4丁目12-4	〃	8. 17 ~ 9. 19
12	右京第174次	7ANSYS	大山崎町円明寺横林	大山崎町教委	8. 23 ~ 8. 24
13	右京第175次	7ANIFD-2	長岡京市野添2丁目	(財)長岡京市理	8. 21 ~ 8. 29
14	右京第176次	7ANNND	長岡京市友岡4丁目1-22	〃	9. 3 ~ 9. 21
15	右京第177次	7ANQUUD-3	長岡京市久貝2丁目209-2	〃	9. 4 ~ 9. 17
16	右京第178次	7ANIOK	長岡京市天神5丁目115	〃	9. 25 ~ 9. 29
17	左京第112次	7ANEUK	向日市鶏冠井町馬司12-1	向日市教委	5. 29 ~ 7. 16
18	左京第114次	7ANFOT-9	向日市上植野大田7-1 他	〃	7. 9 ~ 7. 21
19	左京第115次	7ANMKK	長岡京市神足八ノ坪 他	(財)京都府埋	9. 21 ~
20	左京第116次	7ANMKD	長岡京市神足神田11・12・13	(財)長岡京市理	8. 17 ~ 9. 20

長岡京跡調査地一覧表

長岡京条坊復原図



数字は本文（ ）内と対応

れた。この2条の溝間は当時の道路であったと思われるが、幅2.3～4.2mを測り、小礫混り粘土で固く覆われていた。他に、やはり平安時代前期の掘立柱建物跡や土壇が検出されている。これらの遺構からは、金銅製の鉈尾や石製の丸靱、木簡、「和銅開珎」、「萬年通寶」、「神功開寶」、「富壽神寶」、そして須恵器、土師器等が出土した。木簡には「奥胡万七斗 外二升」と記されている。

右京第163次 (3)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地には、勝竜寺城外郭の土塁や堀が一部残っていた。調査の結果、勝竜寺城北東部の土塁や堀の状況が明らかになり、輸入陶磁器や唐津・美濃・信楽・備前・伊万里などの国産陶磁器が多量に出土した。また、土塁の一部が古墳を利用して作られていることも判明した。この古墳は、径14m前後の円墳もしくは方墳で、主体部は木棺直葬であった。出土遺物から6世紀後半の古墳である。このほか、弥生時代の溝が土塁の下から検出され、溝内から石剣が出土した。

右京第167次 (5)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京期の掘立柱建物跡が2棟検出された。そのうちの1棟は、南に廂を持つ東西棟で3間×4間以上の規模を有する建物である。

右京第168次 (6)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京期の足跡等が検出され、木簡や墨書土器、「神功開寶」等が出土した。墨書土器には、「衛門」・「案」・「大」・「福□」・「大□」等と記されている。

右京第169次 (7)

大山崎町教育委員会

長岡京の九条大路推定地に当るが、長岡京期の遺構は検出されなかった。しかし、古墳時代の竪穴式住居跡が検出され、住居跡内からは、古墳時代中期の須恵器が出土した。なお、この西方で実施された右京第87次調査においても、古墳時代後期前葉の竪穴式住居跡が検出されている。

右京第171次 (9)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

以前から行っている外環状線建設工事に伴う調査の一環である。調査地は、西二坊大路の推定地に当り、西二坊大路の東側溝を検出した。また、以前京都府教育委員会が実施した右京第12・26次

調査で検出されたL字状に東から北へ屈曲する溝 SD 1288 の延長を確認することができた。今回の調査によってこの溝は、西面する帆立貝式古墳の周濠である可能性が強くなった。周濠内からは、古墳時代後期の須恵器・土師器が出土したが、埴輪の出土はなく、また葺石等も見られなかった。すでに埴輪・葺石等をもたなくなった時期の古墳である。この古墳のすぐ南には、古墳時代中期の今里車塚古墳が存在していたことが、以前の調査で判明している。

右京第 173 次 (11)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

右京第 106 次調査地の東接地である。今回の調査で、古墳周濠のくびれ部が検出され、前回調査で方墳であると考えられていた塚本古墳が、全長約 30 m 強を測る前方後円墳であることが判明した。周濠内からは、多量の円筒埴輪と共に朝顔形埴輪・盾形埴輪・衣笠埴輪や須恵器の器台・壺・甕等が出土した。また前回調査と同じく、長岡京朝の須恵器・土師器も周濠内から多く出土している。

右京第 177 次 (15)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

長岡京期の遺構は検出されなかったが、縄文時代晩期の土器や石器が出土した。

左京第 112 次 (17)

向日市教育委員会

長岡京期の東西方向の柵列や弥生時代の自然流路が検出された。遺物としては、長岡京期の須恵器・土師器のほか、縄文時代後期や弥生時代前期の土器が出土した。

(山口 博)

センターの動向 (59. 7～9)

1. できごと

- 7. 5 千代川遺跡第7次(亀岡市)発掘調査終了5. 7～
- 7. 9 長岡京跡右京第171次(長岡京市)発掘調査開始
- 7. 19 平安京跡(京都市右京区＝山城高校)発掘調査開始
- 7. 24 三宝院宝篋印塔基壇から出土した遺物を醍醐寺宝物館に返還
- 7. 25 長岡京連絡協議会開催
- 7. 26 千代川遺跡第8次(亀岡市)発掘調査開始～8. 30
- 7. 27 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議一於枚方市一出席(荒木事務局長, 白塚総務課長, 堤調査課長)
- 8. 1 上中遺跡(北桑田郡京北町＝北桑田高校)発掘調査開始～9. 25
燈籠寺遺跡(相楽郡木津町＝木津高校)発掘調査開始
- 8. 4 石本遺跡(福知山市)現地説明会開催, 参加者約60名
- 8. 22 長岡京連絡協議会開催
- 8. 25～26 埋蔵文化財研究会第16回研究集会一於熊本県高森町一出席(原口理事, 村尾, 岩松調査員)
- 8. 27 千代川遺跡第9次(亀岡市)発掘調査開始
- 9. 20 理事協議会開催一於当調査研究センター研修室一福山敏男理事長, 樋口隆康副理事長, 川上 貢, 原口正三, 佐

原 真各理事, 荒木昭太郎常務理事出席

- 9. 22 隼上り遺跡(宇治市)現地説明会開催, 参加者約50名
- 9. 25 長岡京跡右京第171次(長岡京市)関係者説明会実施
- 9. 26 長岡京連絡協議会開催
- 9. 27～28 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会一於栃木県松山町一出席(白塚総務課長, 安田会計主任, 堤調査課長, 杉原課長補佐, 増田調査員)

2. 普及啓発事業

- 8. 20～31 第3回小さな展覧会一於当調査研究センター研修室一開催, 参観者673名
- 8. 25 第23回研修会一於向日市文化資料館研修室一開催(主題, 発表者及び題名)『昭和58年度発掘調査の成果から』石井清司「亀岡市北金岐遺跡出土の遺物について」, 小山雅人「綾部市青野西遺跡出土の土器について」, 森下 衛「亀岡市千代川・桑寺遺跡出土の古瓦について」, 増田孝彦「重要文化財三宝院宝篋印塔基壇の発掘調査」, 参加者69名
- 9. 13～60. 3. 31 府立桃山高校常設展示に伏見城跡出土品18点を出品協力
- 9. 29 第24回研修会一於福知山市民会館一開催(主題, 発表者及び題名)『最近の

主要遺跡の発掘調査から』辻本和美、
竹原一彦「福知山市石本遺跡の発掘調
査」、大槻眞純、崎山正人「福知山市に
於ける最近の発掘調査」、久保哲正、
後藤公一「野田川町高浪古墳の発掘調
査」、参加者56名

9. 29 『京都府埋蔵文化財情報』第13号刊
行

3. 人事異動（前号掲載分追加）

4. 1 富田敦子、杉江昌乃（以上総務課嘱
託）採用さる。

受贈図書一覧（59. 6～8）

- | | |
|----------------------|---|
| (財)岩手県埋蔵文化財センター | 岩手県埋蔵文化財調査報告書 第70集～第75集 |
| (財)福島県文化センター | 福島県文化財調査報告書 第111集, 同第113集～第118集, 同第128集
～第136集, 製鉄遺跡関連資料 |
| (財)茨城県教育財団 | 茨城県教育財団文化財調査報告 第20集, 同第23集～第26集,
年報 3 昭和58年度 |
| (財)栃木県文化振興事業団 | 諏訪山遺跡第1次発掘調査報告書, 自治医科大学周辺地区昭和58年
度埋蔵文化財発掘調査概報 |
| (財)群馬県埋蔵文化財調査事業
団 | 歌舞伎遺跡, 荒砥島原遺跡, 中尾 |
| (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業
団 | 研究紀要1983, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報 4 |
| (財)千葉県文化財センター | 千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅶ, 千葉東南部ニュータウ
ン14・15, 新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ, 千葉急行
線内埋蔵文化財発掘調査書Ⅰ, 市原市瀬又北・瀬又南, 千葉市大木
戸・板倉町遺跡, 千葉市谷津台貝塚, 市原市雪解沢遺跡,
千葉県文化財センター研究紀要 8 |
| (財)君津郡市文化財センター | 君津郡市文化財センター研究紀要Ⅱ, 祝崎古墳群・戸崎城山遺跡発
掘調査報告書, 二間塚遺跡群確認調査報告書, 高千穂古墳群第11・
12号墳調査報告書 |
| (財)富山県埋蔵文化財センター | 小杉流通業務団地内遺跡群, 七美・大閤山・高岡線内遺跡群,
北陸自動車道遺跡調査報告, 昭和58年度富山県埋蔵文化財調査一覧
環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ, 勝川 |
| (財)愛知県教育サービスセンタ
ー | |
| (財)滋賀県文化財保護協会 | 琵琶湖湖岸・湖底遺跡分布調査概要Ⅱ, 延暦寺発掘調査報告書Ⅲ,
市遺跡発掘調査概要Ⅰ, 長命寺湖底遺跡調査概要, 県営干拓地等農
地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告, ほ場整備関係遺跡発掘
調査報告書 X-1, X-2, X-3, XI-1, 野地小野山遺跡発掘調査概
報, 昭和57年度滋賀県文化財調査年報, 高島バイパス新旭町内遺跡
発掘調査概要, 県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ, |

(財)大阪文化財センター
高槻市立埋蔵文化財調査センター

(財)枚方市文化財研究調査会

奈良国立文化財研究所

(財)元興寺文化財研究所
広島県立埋蔵文化財センター

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

山口県埋蔵文化財センター
(財)愛知県埋蔵文化財調査センター

福岡市埋蔵文化財センター
(財)北九州市教育文化事業団

札幌市教育委員会
平賀町教育委員会
胆沢町教育委員会
仙台市教育委員会
栃木県教育委員会
大平町教育委員会
埼玉県教育委員会
入間市教育委員会

瀬田川、諸川遺跡発掘調査報告書、金ヶ森西遺跡発掘調査報告書、馬場遺跡発掘調査報告書

成合遺跡第一次発掘調査概要、観音寺遺跡第一次発掘調査概要
嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・8、梶原遺跡発掘調査概要

財団法人枚方市文化財研究調査会研究紀要 第1集、楠葉瓦窯跡・栗倉瓦窯跡発掘調査報告、春日

遺跡整備資料Ⅲ 集落遺跡・製作遺跡、奈良国立文化財研究所基準資料Ⅸ 瓦編9、平城京左京三条二坊三坪発掘調査報告、平城京左京四条二坊一坪発掘調査報告、昭和58年度平城京跡発掘調査部発掘調査概報、平城京発掘調査出土木簡概報(十七)、平城京左京二条二坊十三坪の発掘調査、市道九条線関係遺跡発掘調査概報(Ⅱ)、平城京右京八条一坊十一坪発掘調査報告書

元興寺の古瓦、古代研究28・29

下本谷遺跡第5次発掘調査概報、亀山遺跡、石鎚権現第2号古墳発掘調査報告、糸井第2号古墳発掘調査報告、矢野谷古墳、備後国府跡、沖浦遺跡

年報 ひろしまの遺跡、下郷桑原遺跡、岡田山第3号古墳発掘調査報告、法恩地南古墳、駄荷古墳発掘調査概報、小林1号窯跡発掘調査報告、松永バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告、御堂西古墳群発掘調査報告、糸井古墳群発掘調査報告、横山城跡発掘調査報告、隠地上組遺跡、山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)

中世の呪術資料

上辻・鑄銭司大歳・今宿西遺跡、王喜寺山古墳、奥正権寺遺跡Ⅰ
愛媛県総合運動公園(動物園)整備計画関連埋蔵文化財発掘調査報告書、同Ⅱ、四国縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書、仏殿城跡、甕の埋蔵文化財

福岡市埋蔵文化財センター年報 第3号

楠毛川遺跡、長野A・E遺跡調査概報、御堂遺跡、馬貴場遺跡、葛原(A)・(B)遺跡、砥石山遺跡、木村地下式横穴群、徳力遺跡第2地点、春日台遺跡、畑積石塚、本城南遺跡、丸山古墳、畠山古墳、畠山遺跡(B-1地点)、畠山遺跡(D地点)

札幌市文化財調査報告書 XXVII

太師森遺跡

二本木遺跡緊急発掘調査報告書

南小泉遺跡

赤羽根、伯仲遺跡、二ヶ山遺跡・二ヶ山下遺跡

独木舟

埼玉県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度

入間市八坂前窯跡

千葉県教育委員会	竜角寺古墳群発掘調査報告書, 市原市二日市場廃寺跡確認調査報告, 千葉中近世城跡研究調査報告書 第4集, 千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報一昭和57年度一
東京都教育委員会	八丈町湯浜遺跡, 相原遺跡, 下高洞遺跡
神奈川県教育委員会	神奈川県埋蔵文化財調査報告26
金井町教育委員会	泉畑田遺跡
婦中町教育委員会	蓮花寺遺跡の調査, 友坂遺跡調査報告書
野々市町教育委員会	御経塚ツカダ遺跡(御経塚B遺跡)発掘調査報告書Ⅰ
八代町教育委員会	五里原遺跡発掘調査概報
長野県教育委員会	長野県埋蔵文化財発掘調査要覧 その4
長野市教育委員会	浅川扇状地遺跡群, 浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構
各務原市教育委員会	美濃須衛古窯跡群資料調査報告書
多治見市教育委員会	北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書
愛知県教育委員会	愛知県古窯群分布調査報告(Ⅲ), 愛知県重要遺跡指定促進調査報告Ⅶ
滋賀県教育委員会	ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 X-3, 同 XI-1, 瀬田川
野洲町教育委員会	三堂・野々宮遺跡他発掘調査概要報告書, 富波遺跡発掘調査
愛知川町教育委員会	市遺跡発掘調査概要Ⅱ
和泉市教育委員会	府中遺跡群発掘調査概要Ⅳ
柏原市教育委員会	柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1983年度, 大県・大県南遺跡, 柏原市所在遺跡発掘調査概報 1983年度, 大県南遺跡, 発掘ノートⅠ, 太平寺・安堂遺跡 1983年度
四條畷市教育委員会	四條畷市埋蔵文化財包蔵地調査概報1～3, 5～11, 13, 15
吹田市教育委員会	昭和57年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報, 昭和58年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報
羽曳野市教育委員会	古市遺跡群Ⅴ
東大阪市教育委員会	馬場遺跡・鬼塚遺跡・出雲井古墳群発掘調査概要
八尾市教育委員会	八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度, 八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書
兵庫県教育委員会	昭和58年度埋蔵専門職員研修会資料
神戸市教育委員会	昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報, 昭和57年度神戸市文化財年報, 新方遺跡発掘調査概要, 居住遺跡発掘調査概要
宝塚市教育委員会	宝塚市文化財調査報告書 第5集～第7集, 同第9集, 同第12集～第14集, 同第18集, 宝塚市文化財資料3, 同4, 仁川旭ヶ丘古墳群調査報告, 安倉地区埋蔵文化財試掘調査報告書,
龍野市教育委員会	鳥坂古墳群
西脇市教育委員会	播磨・緑風台窯跡
多可郡教育委員会	多可寺址出土の梵鐘製造遺構
八鹿町教育委員会	箕谷古墳群発掘調査概要報告書
天理市教育委員会	前栽遺跡
田辺市教育委員会	三栖廃寺遺跡発掘調査概要Ⅱ, 同Ⅲ, 高山寺遺跡発掘調査概報, 高山寺貝塚発掘調査概要
岡山県教育委員会	岡山県埋蔵文化財報告14, 百間川原尾島遺跡2

広島県教育委員会
広島市教育委員会
豊北町教育委員会
福岡県教育委員会

大分市教育委員会
宮崎市教育委員会

北見市立北見郷土博物館
陸前高田市立博物館
(社)日本金属学会附属金属博物館

日立市郷土博物館
埼玉県立歴史資料館
国立歴史民俗博物館
流山市立博物館
世田谷区立郷土資料館
中野区立中野文化センター郷土史料室

青梅市郷土博物館
調布市郷土博物館
出光美術館
福井県立朝倉氏遺跡資料館
福井県立若狭歴史民俗資料館
敦賀市立歴史民俗資料館
渡辺考古民俗資料館
沼津市歴史民俗資料館
愛知県陶磁資料館
名古屋市博物館
大阪城天守閣
神戸市立博物館

尼崎市立文化財収蔵庫
(財)辰馬考古資料館
橋本市郷土資料館

鳥取県立博物館
岡山県立博物館

尾首城跡発掘調査報告

広島の文化財 第26集～第30集

土井ヶ浜遺跡第8次発掘調査概報

塚堂遺跡ⅡA地区、同ⅢE地区、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—3—, 同—4—, 同—5—, 石崎曲り田遺跡Ⅱ, 今宿高田遺跡, 萱葉古墳群, 特別史跡大野城跡環境整備事業実施報告書Ⅲ, 国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報, 桂川・土師古墳, 鹿毛馬神籠石, 八王寺遺跡群, 田主丸古墳群, 夜須地区遺跡群Ⅰ, 穴ヶ葉山南古墳群, 安永遺跡, 葛川遺跡, 花見遺跡, 原古墳, 香春岳遺跡群調査概報, 穴江・塚田古墳

尾崎遺跡

宮崎市遺跡等詳細分布調査報告書Ⅰ

北見郷土博物館紀要 第14集

縄文時代の貝塚, 気仙大工展, チョウ

金属博物館紀要 創刊号～第8号

年報昭和58年度, 日立市郷土博物館紀要 第4号

研究紀要 第6号

国立歴史民俗博物館研究報告 第4集, 歴博第4号, 同第5号

オランダ古地図展, 流山市立博物館年報 No. 6

考古資料目録Ⅰ

小谷津家文書 第2巻

馬場遺跡

調布の古民家

出光美術館 館報第46号

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡 XV, 朝倉氏遺跡資料館紀要1983

若狭小浜城跡

特別展 円山・四条派と内海三代絵画展

矢出川遺跡群

特別展 あしたか山の旧石器 解説

愛知県陶磁資料館研究紀要 3

名古屋市博物館研究紀要 第7巻

大阪城天守閣紀要 第11号, 同第12号

神戸市立博物館年報 No. 1, 神戸市立博物館研究紀要 第1号,

神戸市立博物館館蔵品目録

尼崎市猪名寺廃寺跡

銅鐸

神野々廃寺跡発掘調査概報Ⅱ, 市脇遺跡ほか発掘調査概報,

東家遺跡発掘調査概報

郷土と博物館 第29巻第2号

岡山県立博物館研究報告 第5号

(財)倉敷考古館

福山市立福山城博物館

(財)日本はきもの博物館

瀬戸内海歴史民俗資料館

博物館等建設推進九州会議

九州歴史資料館

福岡市立歴史資料館

青山学院大学文学部史学研究室

専修大学考古学会

名古屋大学文学部考古学研究室

大阪大学文学部国史研究室

奈良女子大学埋蔵文化財発掘調査会

天理大学附属天理参考館

山口大学人文学部考古学研究室

九州大学文学部九州文化史研究施設

埋蔵文化財研究会

玉川文化財研究所

玉川学園本部台遺跡調査委員会

朝日新聞社出版局プロジェクト室

大阪郵政考古学会

福知山市

宇治市教育委員会

亀岡市教育委員会

城陽市教育委員会

舞鶴市教育委員会

向日市教育委員会

峰山町教育委員会

大宮町教育委員会

山城考古学研究会

京都府立丹後郷土資料館

京都府立山城郷土資料館

倉敷考古館研究集報 第18号

福山市立福山城博物館友の会だより No. 14, 芸備 第12集

日本はきもの博物館総合案内, 岸辺のいとなみ松永湾をめぐる産業史一下駄100年一, ふるさとの信仰行事とはきもの, 世界の木製はきもの

香川県古代窯業遺跡分布調査報告 I

文明のクロスロード MUSEUM KYUSHU 第12号

九州歴史資料館年報(昭和57年度), 同(昭和58年度), 九州歴史資料館収蔵資料目録 3, 大宰府史跡昭和58年度発掘調査概報, シンポジウム古代の西海道と大宰府

福岡市立歴史資料館年報 No. 12

大源太遺跡の発掘調査

専修考古学 第1号

株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書

長法寺南原古墳 II

奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報 II

奉懸古絵馬と新絵馬, 祈願小絵馬

西部瀬戸内における弥生文化の研究

九州文化史研究紀要 第29号

埋蔵文化財研究会第16回研究集会 発表要旨関係資料集 1, 同 2

月見野上野遺跡第2地点発掘調査報告書, 平台北遺跡群発掘調査報告書

玉川学園本部台遺跡調査報告

木の歳時記

郵政考古紀要 'APXAiA IX

福知山市史 第三巻

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第4集, 蛇塚古墳発掘調査概報, 大鳳寺跡第4次発掘調査概報

亀岡市文化財調査報告書 第13集, 亀岡市のしおり

城陽市埋蔵文化財調査報告書 第13集

高迫城跡第2次発掘調査報告書

向日市埋蔵文化財調査報告書 第11集

扇谷遺跡発掘調査報告書

小池古墳群

丹波の古墳 I

祈りのかたち—奉納和船—

山城郷土資料館報 第2号

京都市歴史資料館
泉屋博古館
(財)古代学協会

赤羽一郎
羯磨正信
八幡一郎
小嶋芳孝
安藤鴻基
寺村光晴
安田博幸
前田洋子

瀬戸谷 皓
中村信幸
石部正志
中ノ堂一信
福島雅儀
泉森 皎
賀川光夫

目黒吉明
石川 昇

昭和58年度京都市歴史資料館年報, 京都市歴史資料館紀要 創刊号
泉屋博古館紀要 第一巻
古代文化 第36巻第6号〜第8号, 平安京左京四条三坊十三町一長
刀鉦町遺跡一, 押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町,
法住寺殿跡

常滑焼一中世窯の様相一
溝ノ口遺跡 I
八幡一郎先生寄贈図書目録
寺家, 埴輪以前の古墳祭祀
古代房総史研究 第2号, 房総出土の飾太刀
横滝山廃寺跡発掘調査概報一第3次調査一
物理的・化学的分析による考古学研究(第11報), 同(第12報)
三千年の文化交流日中貨幣展, 紀州の文化財, 日本の鏡コレクション一柄鏡一
長谷・八十古墳群
半田市文化財専門委員報告書一第7集一
別冊「気比史学」第四号 特集向出山古墳
京都窯芸史
七軒横穴群
大和を掘る1983年度発掘調査速報展
政所馬渡, 国東の鬼会面, 大分県丹生台地発見のキリシタン遺物,
宇佐虚空蔵寺塔趾発見の埴仏, Man and Culture in East Asia in
Terms of Archeology and Anthropology, 臼杵磨崖仏造頭の背景
しのぶ考古5〜8
発掘された大阪

—編集後記—

『京都府埋蔵文化財情報』第13号をお届けします。

今回、大槻眞純氏と難波田徹氏に投稿していただき、従来よりも充実した内容になっています。大槻氏は福知山市内で遺物が採集され、今後、注目される「篠尾太田地遺跡」について、また難波田氏は昭和6年に鞍馬寺で発見された押出仏について、それぞれ自論を展開されておられますので御味読下さい。

また、前号に引き続きまして資料紹介を掲載いたしましたので、是非、御利用下さい。

(編集担当 土橋 誠)

経塚出土の押出仏

注1 拙稿「正嘉銘の鞍馬寺銅燈籠」(『MUSEUM』第346号) 1980

注2 田沢金吾『鞍馬寺経塚遺宝』鞍馬寺 1933

注3 『押出仏と仏像型』奈良国立博物館 1983

京都府埋蔵文化財情報 第13号

昭和59年9月29日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社
代表者 中西 亨

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155 (代)